

○今日のテーマ

「謎の芸術家・マン・レイの生涯と作品を探る」

○オンライン用のお名前と住んでいる地域など教えてください。

○「マン・レイ」について知っていることありましたら、お聞かせください。

マン・レイの生涯(1890~1976年・0~86歳)

1

芸術家
マン・レイ
ニューヨーク
0~22歳
1890~1912

- ・1890年0歳・ペンシルベニア州フィラデルフィアに生まれる。両親は移民父はウクライナ、母はベラルーシ。
- ・1904年13-14歳ハイスクールで製図、建築、デッサンなど授業を受ける。
- ・1908年17-18歳N.Y大学で建築を学ぶ。その後絵画に専念する。グラフィックデザインの仕事に就く。前衛芸術に触れる。
- ・1910年19-20歳N.Yデザインアカデミーで美術解剖学・イラスト・肖像画を学ぶ。
- ・1911年20-21歳・布地で抽象作品を制作。
- ・1912年21-22歳・Man-Reyを名乗る。

2

パリで
シュール
レアリズム活動
22~49歳
1912~1940

- ・1913年22~23歳・キュビズム風作品を制作。
- ・1914年23-24歳・アドン・ラクロワと結婚。キュビズム風作品の発表・第一次世界大戦勃発
- ・1915年24歳・マルセル・デュシャンと対面
- ・1920年29歳「ローズ・セラヴィ」デュシャンの撮影するトリストラン・ツアラと文通
- ・1921年30歳「N.Yダダ」編集パリへ乗船しダダイストたちと会う。ブルトンと対面
- ・1922年・32歳カメラなしの画像焼付け技法を発見する。
- ・1927年36歳キキを連れて帰郷する。デュシャン結婚しすぐ離婚する。
- ・1933年43歳スペイン旅行でダリに会う。

3

ハリウッド
アートの新天地
49~60歳
1940-1951

- ・1940年49歳・アディを残し船でニューヨークへ。ダリ夫妻も乗船していた。
- ・1941年52歳・グッケンハイムが「今世紀の美術展」を開催。マン・レイの作品も所蔵・展示される。
- ・1945年55歳・ドイツ軍降伏をブルトンやデュシャンと共に祝う。
- ・1946年・ビバリーヒルズでマン・レイとジュリエットとエルンストとドロティア・ターニングの合同結婚式を行う。
- ・1947年・57歳シュールレアリスム国際展に参加。ブルトンとデュシャンの企画による。

4

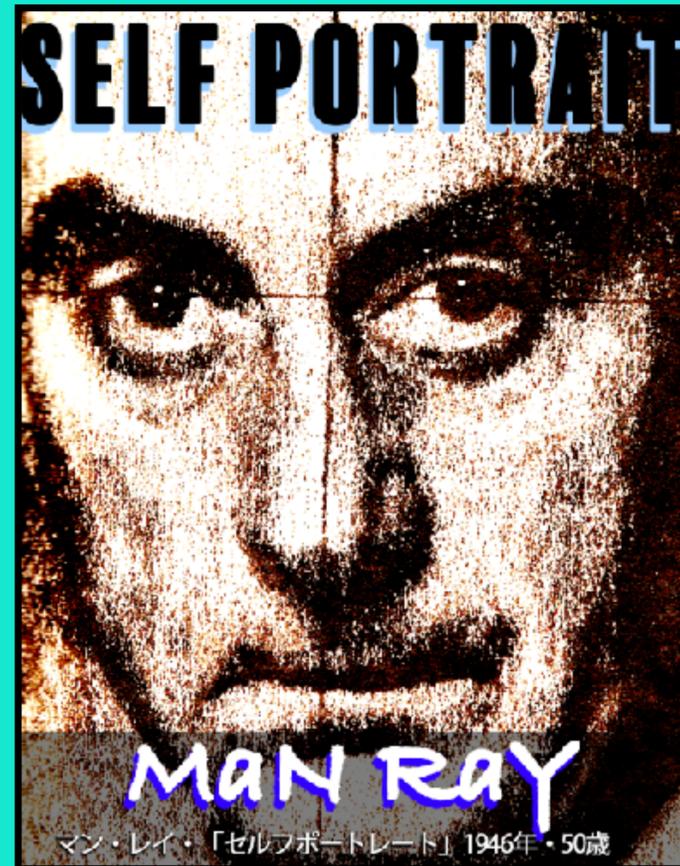
パリ再び
ジュエリーと
モード
60~86歳
1951-1976

- ・1951年61歳・ジュリエットと共にパリへ立つ。フェルリー通りのアトリエに移り終の住処とする
- ・1952年62歳ポール・エリュアール死去(57歳)。
- ・1957年67歳・「ダダ1916-1922」展・保険金で「破壊できないオブジェ」の複製許可
- ・1961年71歳・「ヴェニチア・ビエンナーレ」で金獅子賞を受賞
- ・1965年75歳・プロバンスで一夏過ごす。パリでシュールレアリスム国際展に出品。
- ・1966年76歳・ドイツ写真協会賞を受賞。
- ・1976年86歳フランスより芸術功労賞受賞。パリで死去

芸術家マン・レイの経歴と人物像



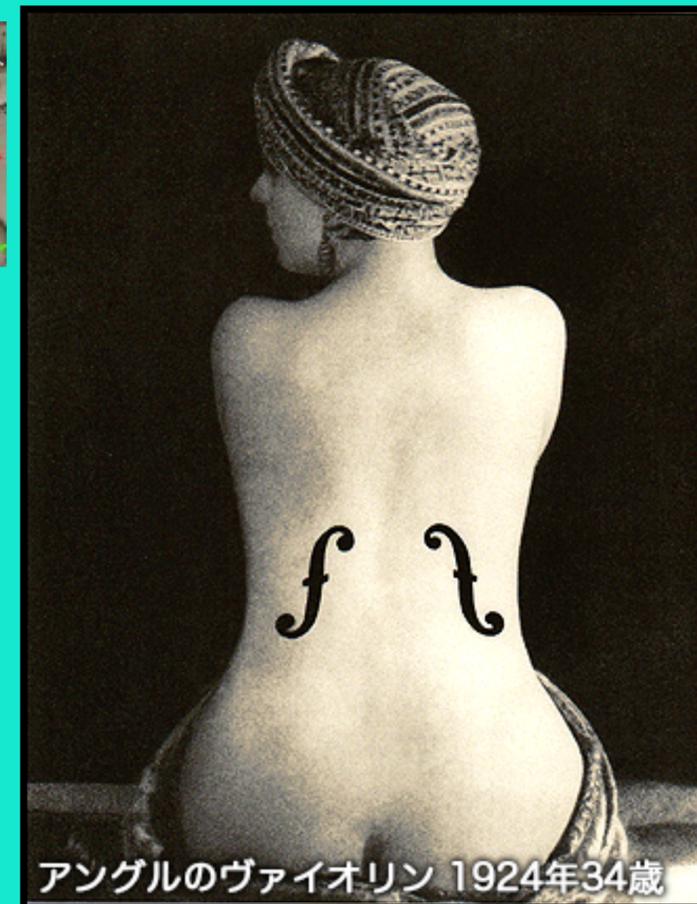
マン・レイと妹ドーラのいる家族写真



マン・レイ・「セルフポートレート」1946年・50歳



ノワール・エ・ブランシェ(白と黒)1926年36歳



アングルのヴァイオリン 1924年34歳

○マン・レイの本名はエマニュエル・ラドニツキーといわれています。1890年8月27日、ウクライナとベラルーシから来たユダヤ人の移民夫婦の長男として、フィラデルフィアで生まれました。3年後に弟、5年後と7年後に妹が誕生します。エマニュエルはふだんマニーという愛称で呼ばれました。1897年に一家はニューヨーク東部のブルックリンに移り、仕立屋を開業します。マニーは両親に似て器用な子で、絵や工作を好み、チョッキを仕立てる父母の手伝いもしでいました。学校では製図やデッサンも習い、やがて画家になる決意をします。成績優秀で卒業時には表彰され、大学で建築を学ぶ奨学金も約束されていたのに、辞退して母を怒らせました。それでも決心をまげず、広告事務所などで働きながら、風景や人物の習作に励むようになります。

マン・レイはニューヨークでアートの勉強を始め、初期の頃は主に絵画や彫刻を制作していました。しかし、パリに移住後、写真に魅了され、シュルレアリスムやダダイズムの運動に影響を受けながら独自のスタイルを確立します。彼の作品には、既存の美学を打破し、視覚的な前衛を追求した実験的な要素が多く見られます。マン・レイの交友関係は広く、ピカソやダリをはじめとするアーティストたちとの交流を深め、数々の女性アーティストやモデルと親密な関係を築きました。彼の作品に登場する女性像には、優しさや強さ、神秘的な美しさが融合しており、彼の美術における重要なテーマの一つとなっています。

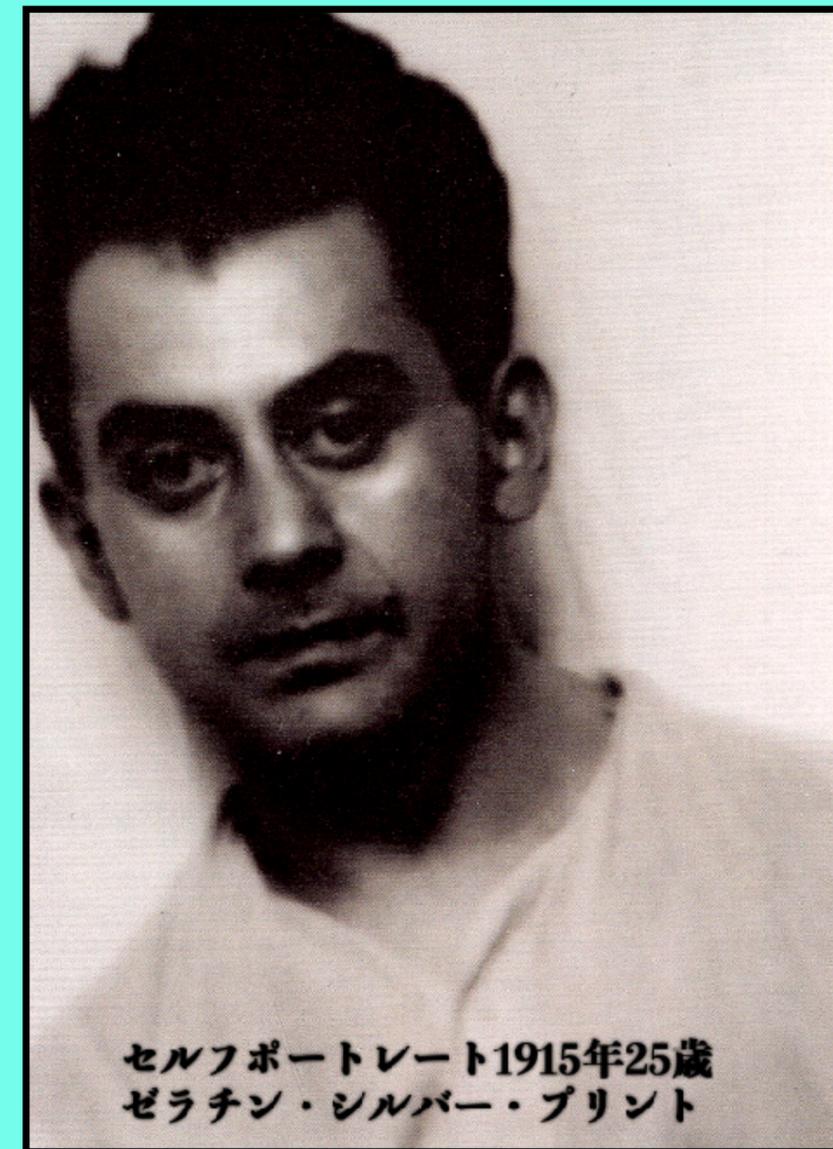
①-1・1916-1921年(26-31歳)・セルフポートレート



セルフポートレート・1916年・26歳

○マン・レイは1916年26歳に試みた二度目の個展で、《セルフポートレート》という作品を発表しました。黒・灰・白の地の上に既製品のベルと電動ボタンをとりつけ、自分の手形を赤く捺した奇妙な平面オブジェです。二つのベルが「目」にあたりますが、ボタンを押しても鳴らず、いうことをききません。顔の中央には「手」だけ。冗談とも思われそうなこの作品に、いかにもマン・レイらしい自意識と謎かけと遊び心が横溢(おういつ)しています。いうことをきかないベルは世間に反抗する芸術家の目、自己を刻印した手形は大胆な作業をする芸術家の手でしょう。そもそもマン

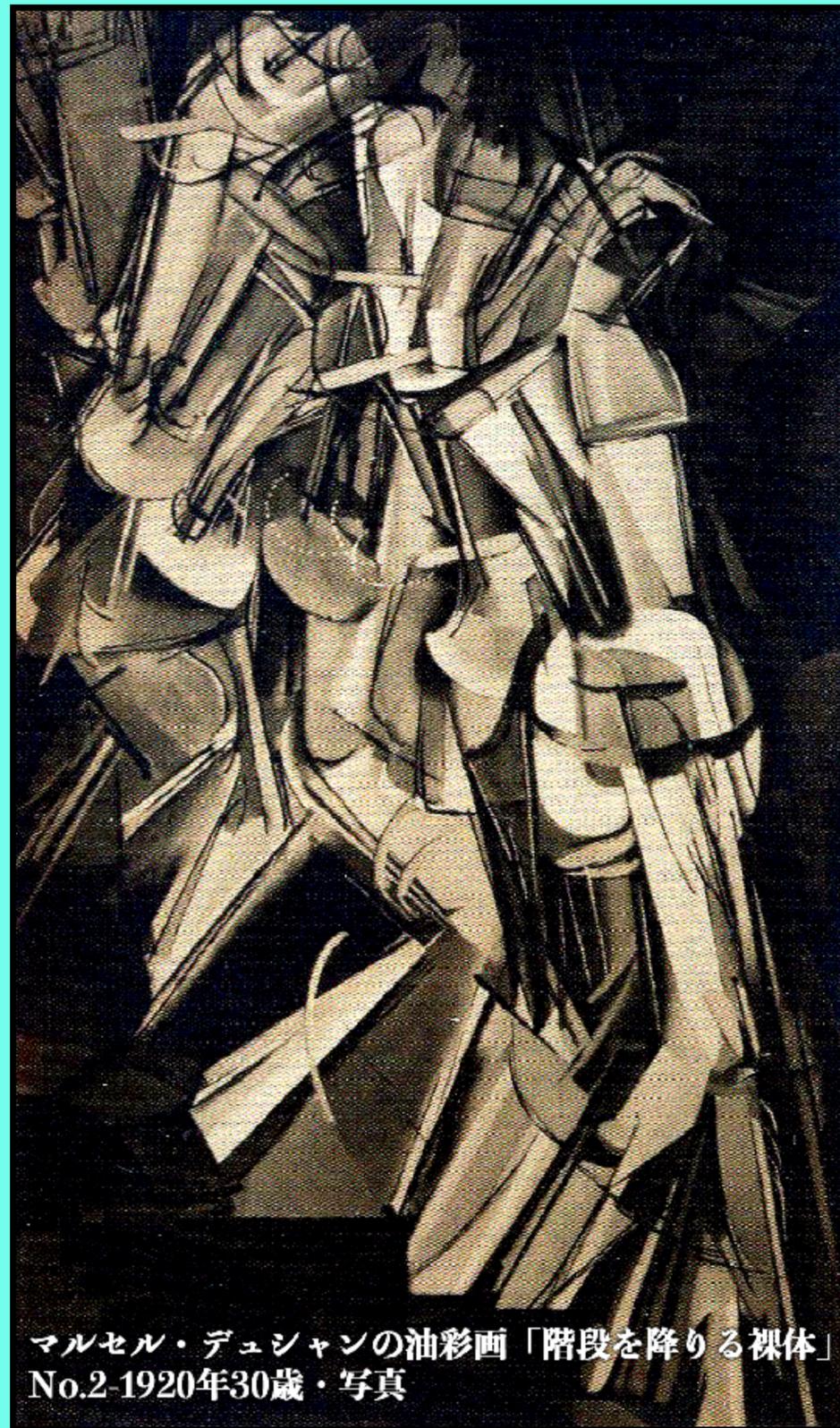
(Man=人) という名は発音上、フランス語のマン(Main=手)に通じます。レイ(Ray=光線または視線)は目に対応しますから、ここにはマン・レイ(人/手・光線)自体が投影されているわけです。



セルフポートレート1915年25歳
ゼラチン・シルバー・プリント

○1915年の《セルフポートレート》は、友人でも先人でもあった写真家、ステイグリッツが撮ったのではないかといわれます。自己演出の少ない写真で、20代なかばのマン・レイは真面目で精悍(せいかん)でどこか初々しく、曖昧な未来を見やっているようです。彼はすでにアドン・ラクロワと結婚し、精力的に制作をつづけていました。前年にはヨーロッパで未曾有の世界大戦がはじまり、アメリカはまだ参戦していませんが、底知れぬ不安が社会に漂っていた時期です。マン・レイは同年秋、パリから徴兵を逃れて渡米してきたマルセル・デュシャンと出会い、やがてニューヨーク・ダダの推進者のひとりになるのです。

①-2・1916-1921年(26-31歳)・ダダ時代の作品



マルセル・デュシャンの油彩画「階段を降りる裸体」
No.2 1920年30歳・写真

○ダダ運動がおこったのは1916年、中立国スイスのチューリヒが発祥地でした。戦争を逃れてきた若い詩人・芸術家たちが、愚かな大戦に行きついた西欧の旧体制に反抗し、「**なんにも意味しない**」ダダという標語のもとに、過激な言語破壊と**反・芸術の狼煙(のろし)**をあげました。詩人ツアラに画家ピカビアなどの協力もあり、運動はまもなく国際化して、**ニューヨークへも飛び火**しました。デュシャンの作品はダダの先駆でしたが、**1917年のアンデパンダン(独立)芸術展に送りこんだ「泉」**は決定的でした。既製品の男性用便器を横に倒して提示する行為だけで、従来の芸術の概念を覆(くつがえ)してしまいました。



○マン・レイもデュシャンに協力して、雑誌や展覧会でダダ的な活動をつづけ、1920年にはパリ帰りのキャサリン・ドライヤーと三人で「ソシュテ・アノニム」(匿名協会=株式会社を意味するフランス語で、マン・レイの命名)を結成し、ダダの拠点にします。作品もすでに大きく進化していました。《泉》と同じアンデパンダン展に出品した《女網渡り 芸人は彼女の影をともなう》は画期的です。デュシャンの《花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも》に影響されながらも大胆に色彩を配置し、表現の「網渡り」をしています。



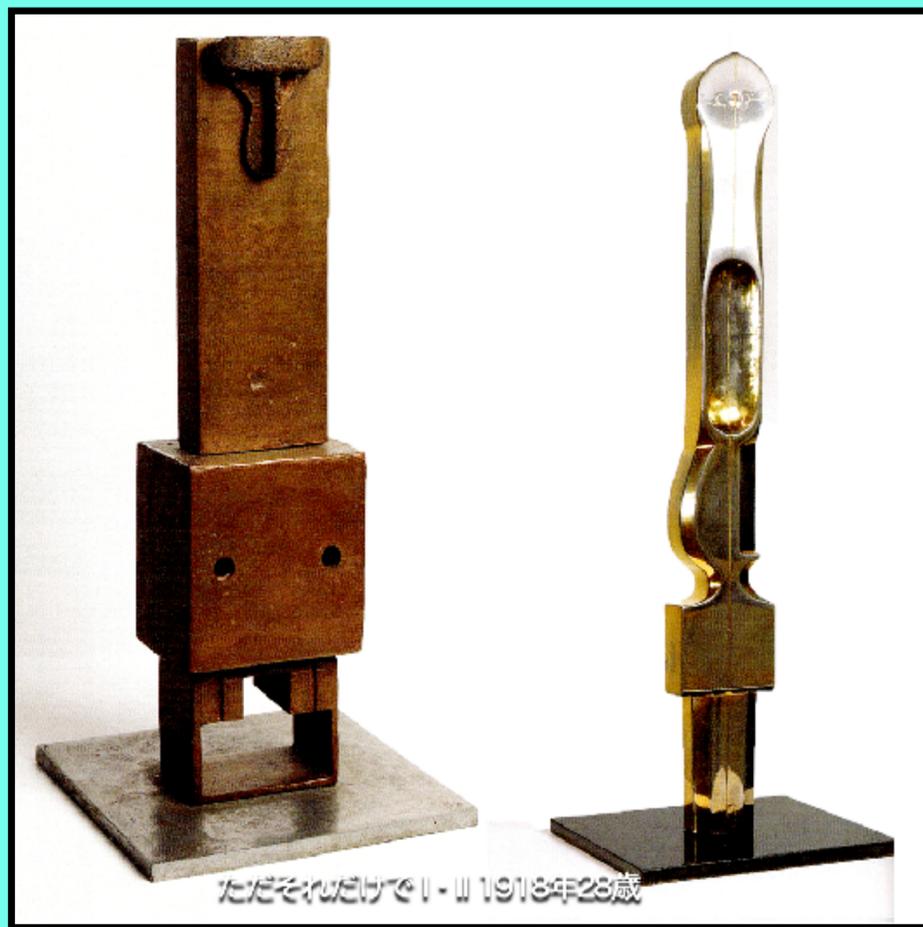
3分でわかるマン・レイ



①-3・1916-1921年(26-31歳)・ダダ時代の作品



ローズ・セラヴィの肖像1921年31歳



ただそれだけでI-II 1918年28歳



「イジドール・デュカスの謎」1920年30歳

○肖像写真は若い女性**ベレニス・アボット**あたりから試みていますが、白眉といってもよい名作は《**ローズ・セラヴィの肖像**》でした。フランス語で「薔薇、それは人生」を意味するこの名をもった架空の女性は、命名者**デュシャン自身の扮装**によって彼の分身になりました。マン・レイの写真による共謀から生まれた謎の女性像です。ダダ時代のこうした作品はほとんど売れず、評価されませんでした。マン・レイは**芸術に冷淡な町ニューヨークに失望して、パリへの脱出を考えていました。**

○《**イジドール・デュカスの謎**》はマン・レイ自身にかかわる「謎」をはらんだオブジェ作品ですが、デュカスすなわちロートレアモン伯爵の『マルドロールの歌』の主人公と同様、冒険の旅に出る彼自身の心情を反映していた作品でもあるでしょう。布に包まれ紐で縛られた物体。この中には何が入っているのでしょうか。そのヒントは作品のタイトルにあります。**イジドール・デュカス**とは、「ロートレアモン伯爵」と名乗っていた南米ウルグアイ生まれの19世紀フランスの詩人です。奇妙で変幻自在な言葉で書かれた長編叙事詩『**マルドロールの歌**』など、わずかな作品を残して無名のまま夭折しました。

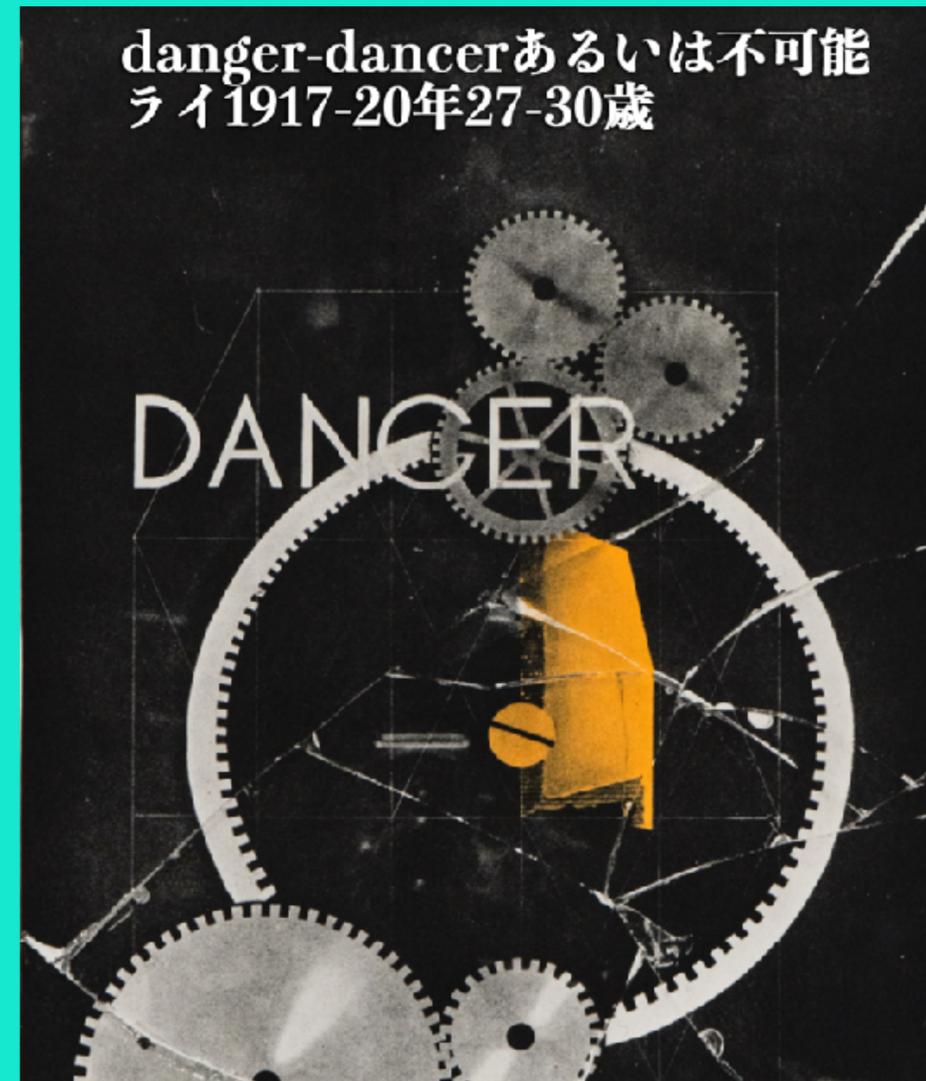
①-4・1916-1921年(26-31歳)・ダダ時代の作品



new-york1920年30歳

○マン・レイの作品の多くと同様に、「**ニューヨーク**」も「ボールベアリング」、「ルーレマン・ハビレ（転がりやすいもの）」、「輸出商品」など、様々な名称で知られています。オリジナルの作品（後に破壊されました）は1920年にニューヨークで制作されたもので、オイル漬けのオリーブの瓶でしたが、マン・レイはオリーブを鋼球に置き換えていました。瓶には「**ニューヨーク**」というラベルが貼られていましたが、これはおそらく、その直立した形状が**ミニチュアの超高層ビルを想起させたため**でしょう。いずれにせよ、マン・レイは1920年にこの作品をフランスに持ち帰り、税関職員に、もし困難な状況に陥った時に、この瓶があれば何か食べ物があるような錯覚を覚えるだろうと語りました。これはマン・レイが**ニューヨーク・ダダ運動の最盛期に制作した初期のオブジェ**です。オリーブとボールベアリングを組み合わせたこの作品は、ジョークやメタファーでよく使われる代用表現を視覚的にも物質的にも表現しており、かつては主に言葉の領域と考えられていた観念や連想の自由な戯れを、立体的なオブジェで表現できる例となりました。

danger-dancerあるいは不可能
ライ1917-20年27-30歳



○「**デンジャー・ダンサー**」と題された、高品質紙に額装されたリトグラフ。1920年の作品・ポンピドゥー・センター所蔵・・・1921年12月、パリで初めて開催された「Librairie Six」（「L'Impossibilité」というタイトルで、1917-1920年の制作）出品した。精密な歯車と同様、ダンサーも一つ誤れば大事故です。その意味では曲芸師に似たところがあり、ダンサーも曲芸師も、表向きは華やかだったり戯けていたりするものの、常に死と隣り合わせなのです。

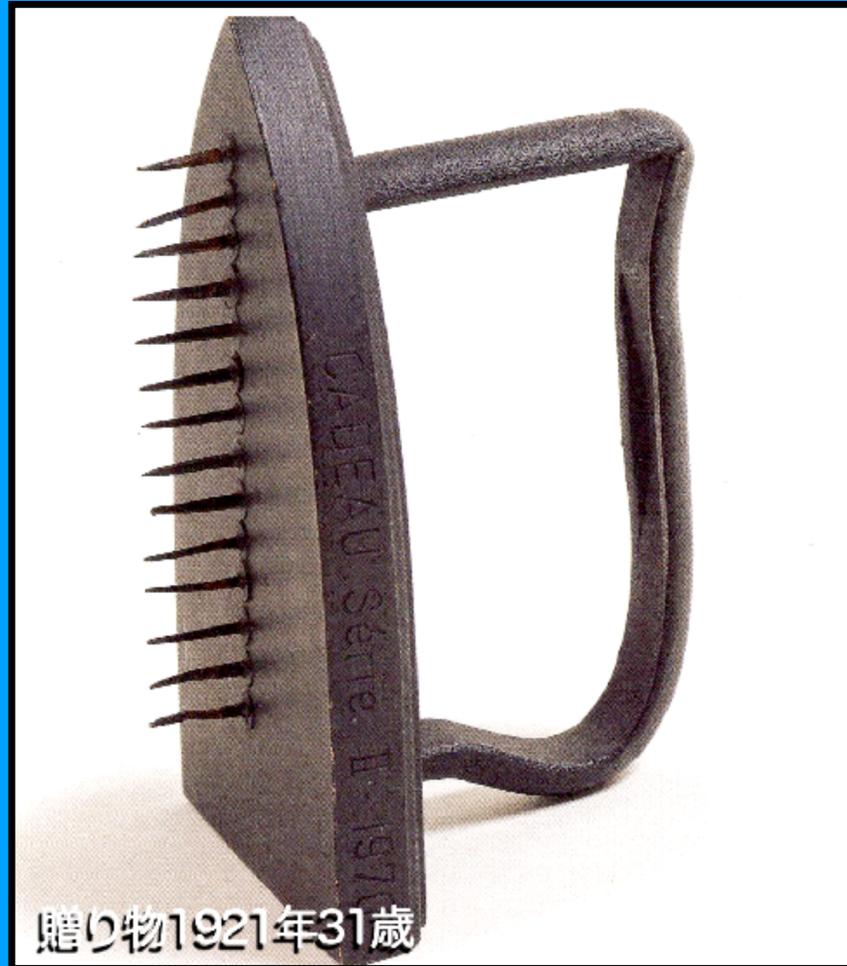
②-1(1921~1940年・31~50歳)・パリでのダダ・シュールレアリスム活動



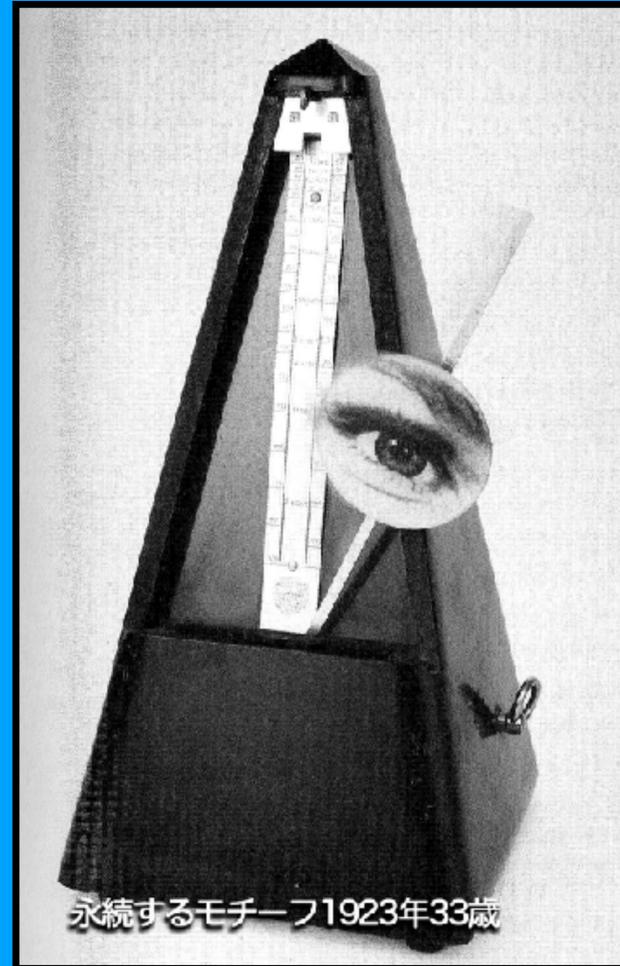
○パリ1921年7月22日、パリのサンラザール駅に着いたマン・レイは、デュシャンに出迎えられ、その日のうちにカフェ「セルタ」へ同行すると、当時はダダイストだった未来のシュールレアリストたちに紹介されました。マン・レイよりも5歳以上若く、彼に敬意をいただいている詩人たちでした。アンドレ・ブルトン、ポール・エリエールとその妻ガラ、ルイ・アラゴン、フィリップ・スーポー、ジャック・リゴーといった面々から真筆な歓迎を受け、スーポー所有の画廊でパリ初の個展をひらくことができました。

○マン・レイ (Man Ray) という名は、本名のエマニュエル・ラドニツキー (Emmanuel Radnitsky) を省略した形ですが、英語でManは「人間」、Rayは「光線」の意味も持ちます。いわば「人間／光線」といったところ。〈前と後〉という写真には奇妙なところがあります。この不思議な姿と「厳しい目つき」との対比のおかしさ。このようなユーモアは、マン・レイの特徴の一つです。「あなたは何者なのですか」という問いかけに、彼はこう答えたそうです。「私は謎だ。」

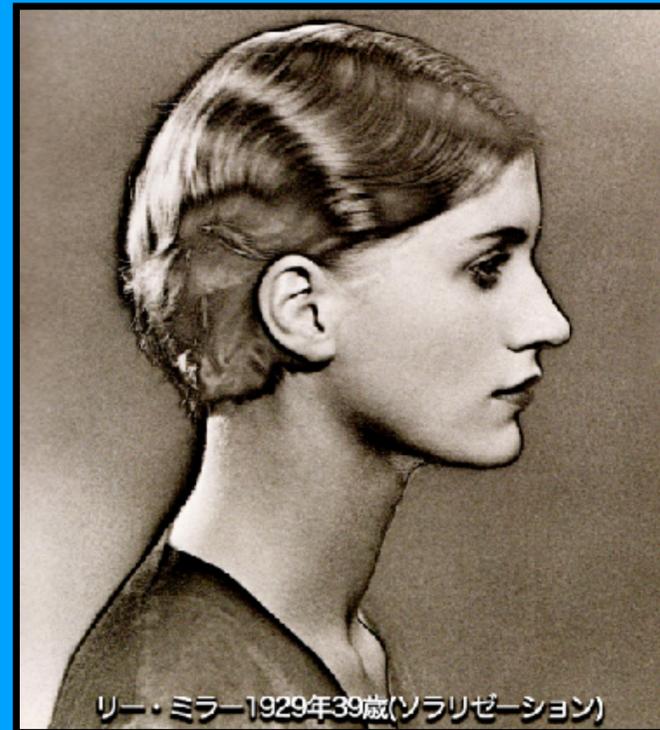
②-2(1921~1940年・31~50歳)・パリでのダダ・シュールレアリスム活動



贈り物1921年31歳



永続するモチーフ1923年33歳



リー・ミラー1929年39歳(ソラリゼーション)



マンレイの映画「エマク・バキア」1926年36歳

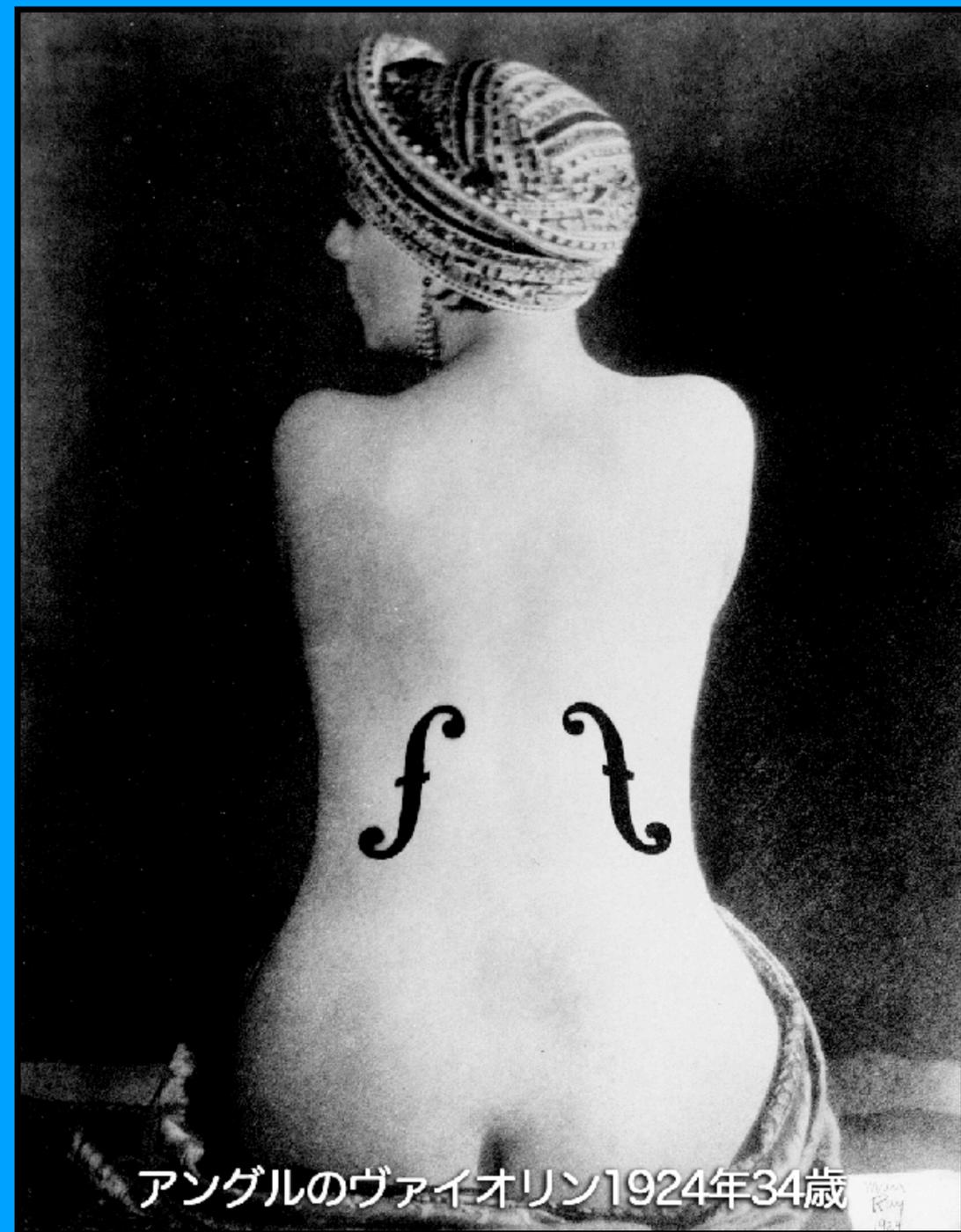


エマク・バキア 1926年・36歳

○マン・レイはシュールレアリスム運動に参加し、第二次大戦の直前まで協力し続けました。ほとんどのメンバーと交友しましたが、詩人ではエリエールやデスノスなどと親しく、共作も試みています。シュールレアリスムにとってもマン・レイの協力は不可欠で、とくに写真による寄与は決定的でした。彼自身が指導的存在ではなかったにしても、精神の自由を求める生き方には共感し、しばしばシュールリアリストを自称してもしました。

○メトロノームは音楽好きのマン・レイにとって身近なものでした。左右に行き来するその棒の先に女性の目の写真をつけたこのオブジェは、1932年に「破壊されるオブジェ」としてリーの目の写真に付け替えられました。

②-3(1921~1940年・31~50歳)・パリでのダダ・シュールレアリスム活動



アンダルのヴァイオリン1924年34歳

○ マン・レイはモンパルナスを住処として、生活のために小さな写真スタジオを設けます。戦勝国のフランスは復興し始めていて、この地区には世界中から芸術家たちが集まってきたので、友人がすぐに増えて肖像写真の注文もありました。1921年末にはカフェでひとりの若い美しい女性と出会い、愛しあい、同棲することになります。キキ・ド・モンパルナスと呼ばれ、モデルの素質に恵まれていた彼女は、画家たちの描く肖像画や裸体画に加えて、マン・レイの写真の被写体としても名声を博しました。



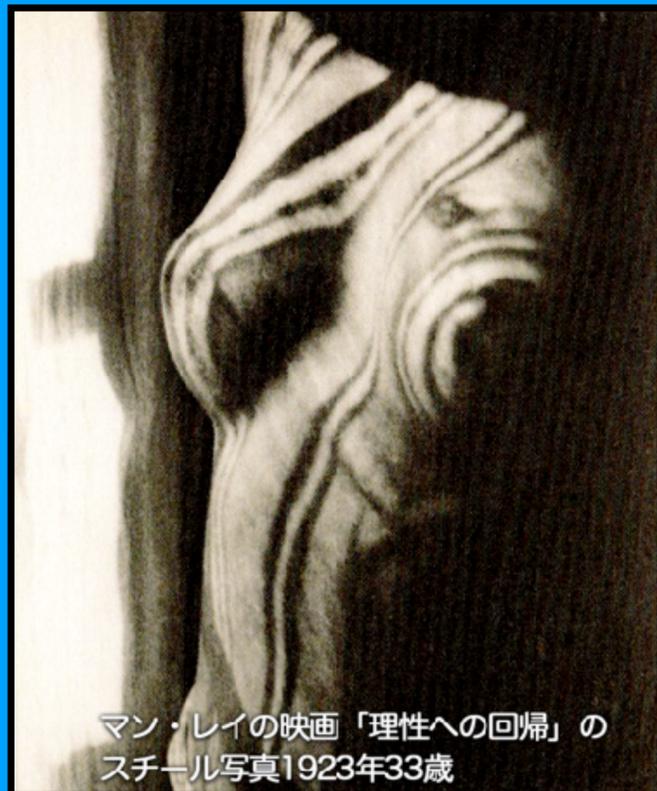
黒と白・1926年36歳

○ マン・レイ作『黒と白』。1926年、パリで生まれた写真です。写っているのは、黒い仮面に手をかけながら机の上に顔を横たえた女性。女性の白い肌と黒い仮面、水平に横たえた顔と垂直に立てられた仮面、あらゆる対比を内包しながら、奇跡のように美しいバランスを保つ一枚です。こうした構図は、当時の芸術の潮流であったダダイズムやシュールレアリスムを取り入れたものでした。マン・レイはこの一枚で、当時の人々が抱いていた写真に対する概念を大きく覆します。それまで、人物や風景を正確にコピー出来る機械だと考えられていた写真が、れっきとした芸術であることを示したのです。この写真という新しい芸術が生み出された背景には、ある女性の存在が大きく関わっていました。

②-4(1921~1940年・31~50歳)・シュールレアリスム・技法の発見



女性の思索(レイヨグラフ)1922年32歳

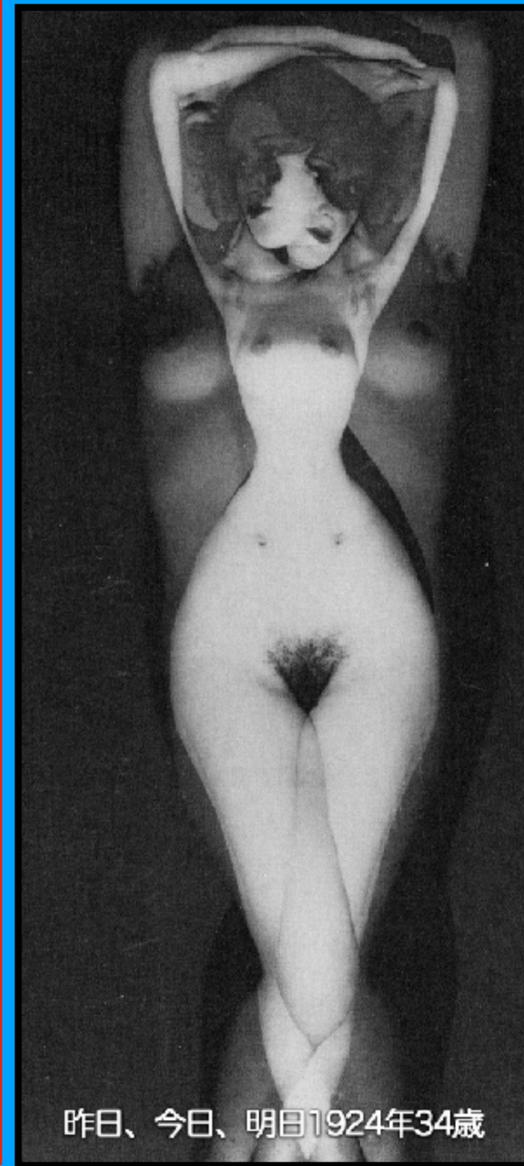


マン・レイの映画「理性への回帰」の
スチール写真1923年33歳

○マン・レイは**写真の焼付**をしているときに、ある発見をしました。**印画紙にじかに物を置き、光をあててから現像すると、不思議な映像が得られる**という現象です。カメラなしでオートマテイツクに生じるこの写真ならぬ写真に、彼は「**光線**」を意味する自分の名**レイ**を冠して、「**レイヨグラフ**」という呼称を与えました。それを見た**ツアラ**に勧められて以来、身近な素材を用いて制作をつづけます。前例もある技法ですが、マン・レイの場合は**絵画的傾向**が強く、日常の現実から新しい現実**(超現実)**を生まだす一例とされ、シュールリアリストたちにも**歓迎**されました。



キキ・ド・モンパルナス(シュールレアリスムの映画)
1924年34歳



昨日、今日、明日1924年34歳



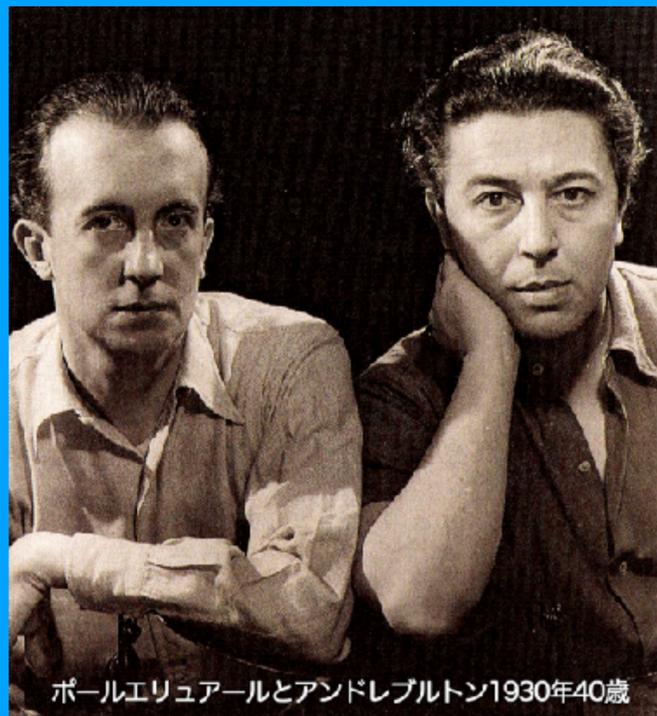
醒めてみる夢の会1924年34歳

前列左から シモーヌ・ブルトン、ロベール・デスノス、ジャック・バロン、フィリップ・スーポー
後列左から マックス・モリーズ、ロジェ・ヴィトラック、ジャックアンドレ・ボワファール、アンドレ・ブルトン、ポール・エリュアール、ピエール・ナヴィル、ジョルジョ・デ・キリコ

②-5(1921~1940年・31~50歳)・シュールレアリスムの肖像

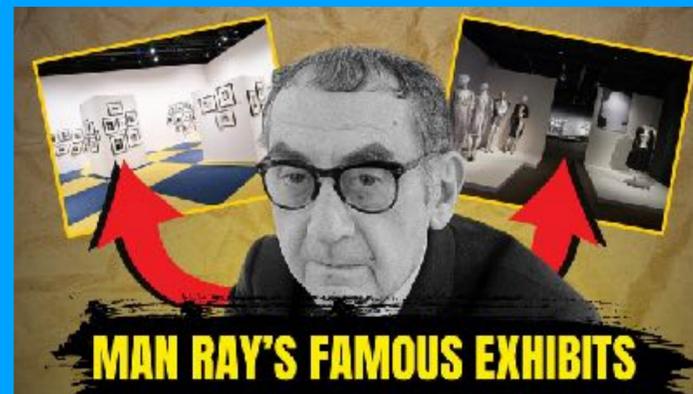


トリストラン・ツアラの肖像1922年

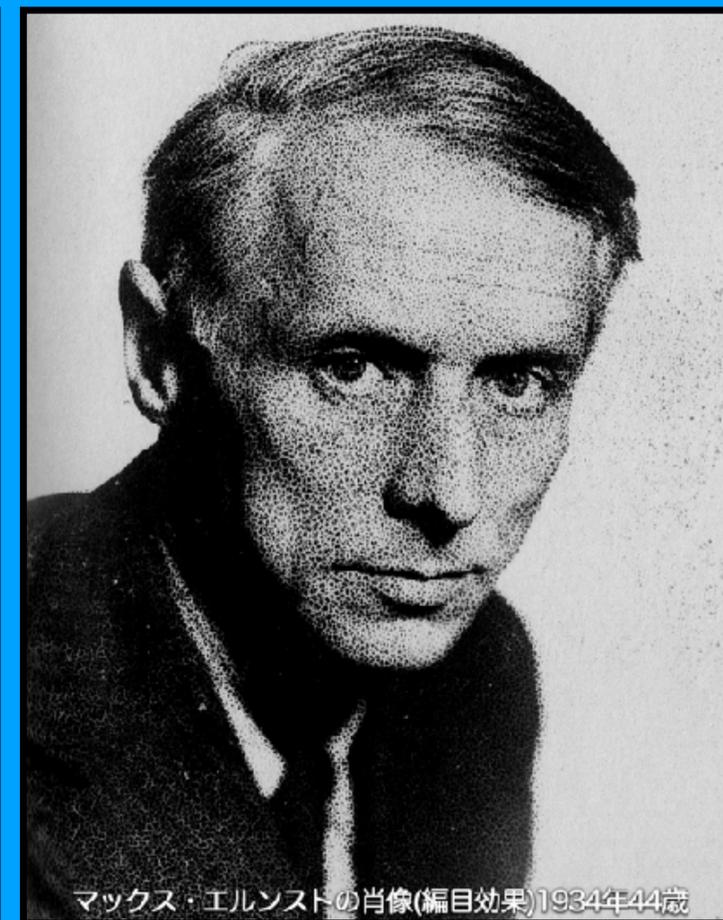


ポールエリュアールとアンドレブルトン1930年40歳

○ マン・レイは1924年からシュールレアリスムのメンバーになり、とくに写真によってこの運動に貢献しました。レイヨグラフィなどをふくむ作品の価値はもちろんですが、機関誌のほか個別の刊行物に写真を提供し、また集合写真や肖像写真の数々を通じて、グループの視覚的イメージを世界にひろめました。エリュアールとは親しく、詩画集『自由な手』などは交友から生まれたものですが、風貌にも惹かれていた（ボードレーンそっくりだと許しました）ようで、肖像写真をよく撮りました。エリュアールの二番目の妻ニュッシュも好みのモデルになり、彼女の裸体を撮った写真とエリュアールの詩による名作『容易』が生まれています。

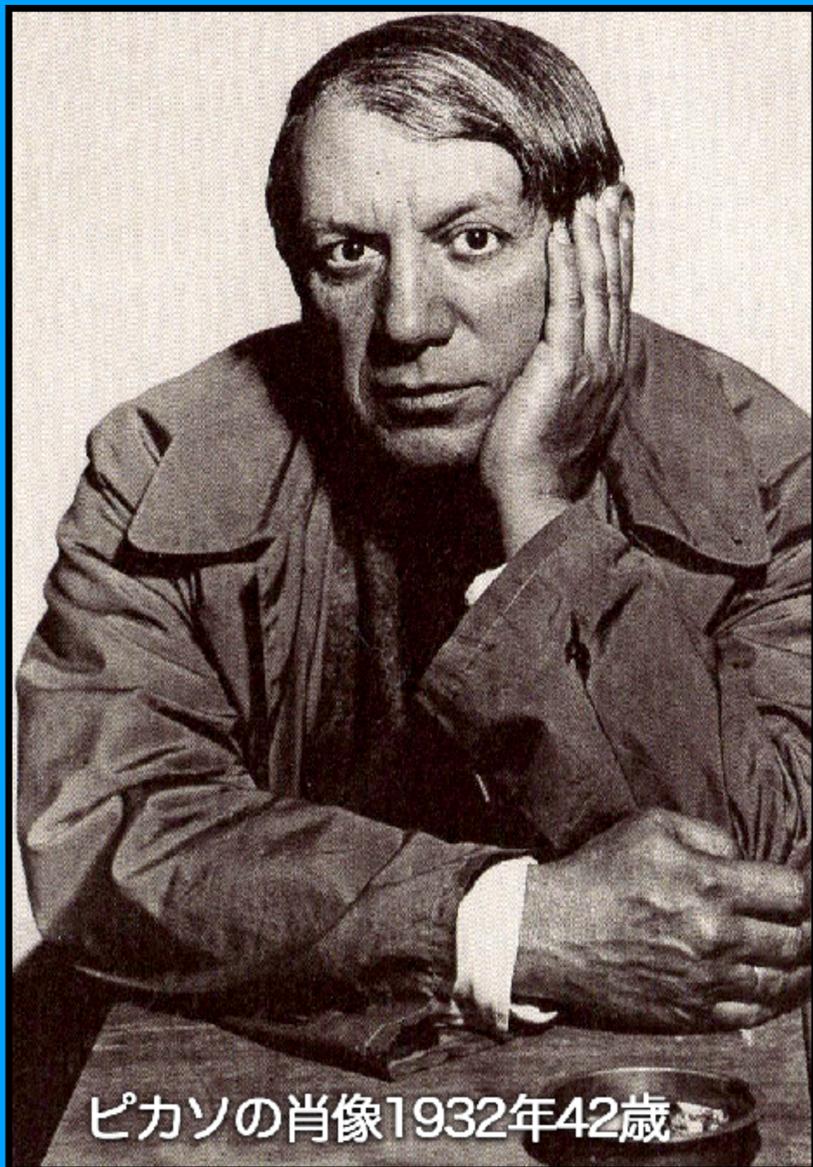


ニュッシュとポール・エリュアール1935年45歳



マックス・エルンストの肖像(編目効果)1934年44歳

②-5(1921~1940年・31~50歳)・シュールレアリスムの肖像



ピカソの肖像1932年42歳



ダリの肖像1932年42歳



マックス・エルンストとマリーベルト・オーランシュ1928年38歳

○シュールレアリストたちを撮影する機会が多く、メンバーのほとんどを写真におさめています。パリ・ダダの立役者でのちに一時シュールレアリストになるツアラはもちろん、主力のアラゴンから年長者のピカソ、運動参加の遅かったルイス・ブニュエルやサルバドール・ダリまで、友人たちの各時期にわたる肖像をのこしています。

②-6 (1921~1940年・31~50歳)・シュールレアリスムの肖像



ガラとダリ1936年46歳



アンドレ・ブルトンの肖像1930年40歳



ルイス・ブニュエルの肖像1929年39歳

○ **運動の指揮者ブルトンとは多少の距離**がありましたが、協力関係は緊密で、写真集などに序文を贈られていたほか、**ブルトン**の著書『ナジャ』には友人たちの肖像写真を提供しています。この本は挿絵のかわりに写真を用いた試みで、パリの町の写真は**マン・レイの助手ジャックアンドレ・ボワファール**が担当し、文章に写真が有機的に応える画期的な書物になりました。

○ シュールレアリストたちを撮影する機会が多く、メンバーのほとんどを写真におさめています。パリ・ダダの立役者でのちに一時シュールレアリストになるツアラはもちろん、主力のアラゴンから年長者のピカソ、運動参加の遅かった**ルイス・ブニュエル**や**サルバドール・ダリ**まで、友人たちの各時期にわたる肖像をのこしています。

②-7 (1921~1940年・31~50歳)・シュールレアリスムの肖像

シュールレアリストたちの 実験

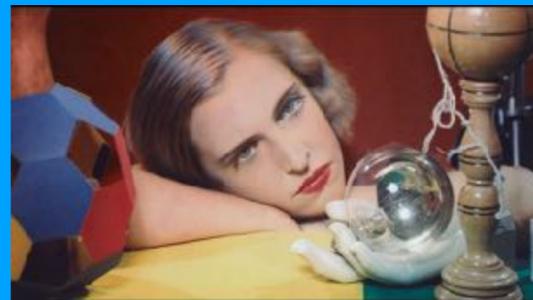
自己催眠によって自動口述にふけている詩人ロベール・デスノスの言葉を、アンドレ・ブルトンの妻シモーヌ・カーンがタイプライターで速記している光景です。

前列左から シモーヌ・ブルトン、ロベール・デスノス、ジャック・バロン、フィリップ・スーポー
後列左から マックス・モリーズ、ロジェ・ヴィトラック、ジャック・アンドレ・ボワファール、アンドレ・ブルトン、ポール・エリュアール、ピエール・ナヴィル、ジョルジョ・デ・キリコ



Fig. 4
醒めてみる夢の会 (シュールレアリスム研究本部にて) 1924
ゼラチン・シルバー・プリント

②-8 (1921~1940年・31~50歳)・キキ・ド・モンパルナス



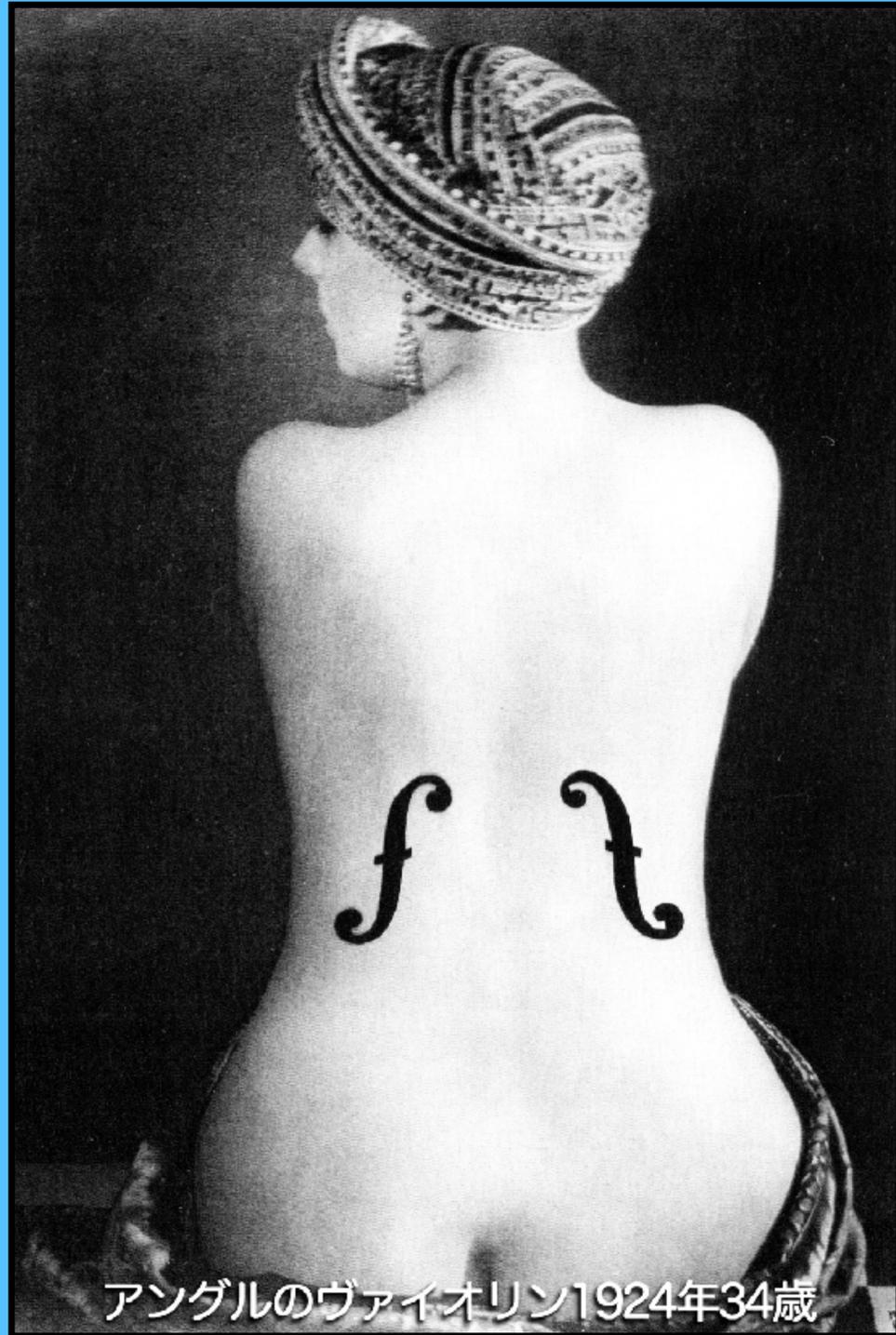
ヴェールをかぶったキキ1922年32歳

○キキ・ド・モンパルナス・・・ブルゴーニュ地方の田舎町に私生児として生まれ、12歳でパリに出た**少女アリス・プラン**は、第一次大戦後、17歳のころからモンパルナスの人気者になり、**キスリング**や藤田嗣治やスーティンなどの画家たちのモデルをしていました。キキという渾名(あだな)は**キスリング**がつけたといわれています。彼は**キキの美貌と資質に打たれ**、絵よりも写真のモデルになってほしいと頼みました。そのとき以来、7年にわたって同棲生活を送るあいだに、注文仕事ではない多くの肖像写真・裸体写真を撮りつづけます。**キキはマン・レイのミューズになったのです。**



モンパルナスのキキ 1925年
キスリング作

②-9 (1921~1940年・31~50歳)・キキ・ド・モンパルナス



○ 数多い写真作品のなかでも、代表作とみなされる1924年の《**アングルのヴァイオリン**》は、一目で19世紀前半の大画家**アングルの名作《ヴァルパンソンの浴女》**を連想させるもので、題名は成句です。アングルがヴァイオリンの演奏を得意とし、来客に聴かせていたという故事から「余技」の意味になりますが、これはマン・レイが画家を自負しつつ、写真という「余技」にかまけていることへの反省とも読めます。



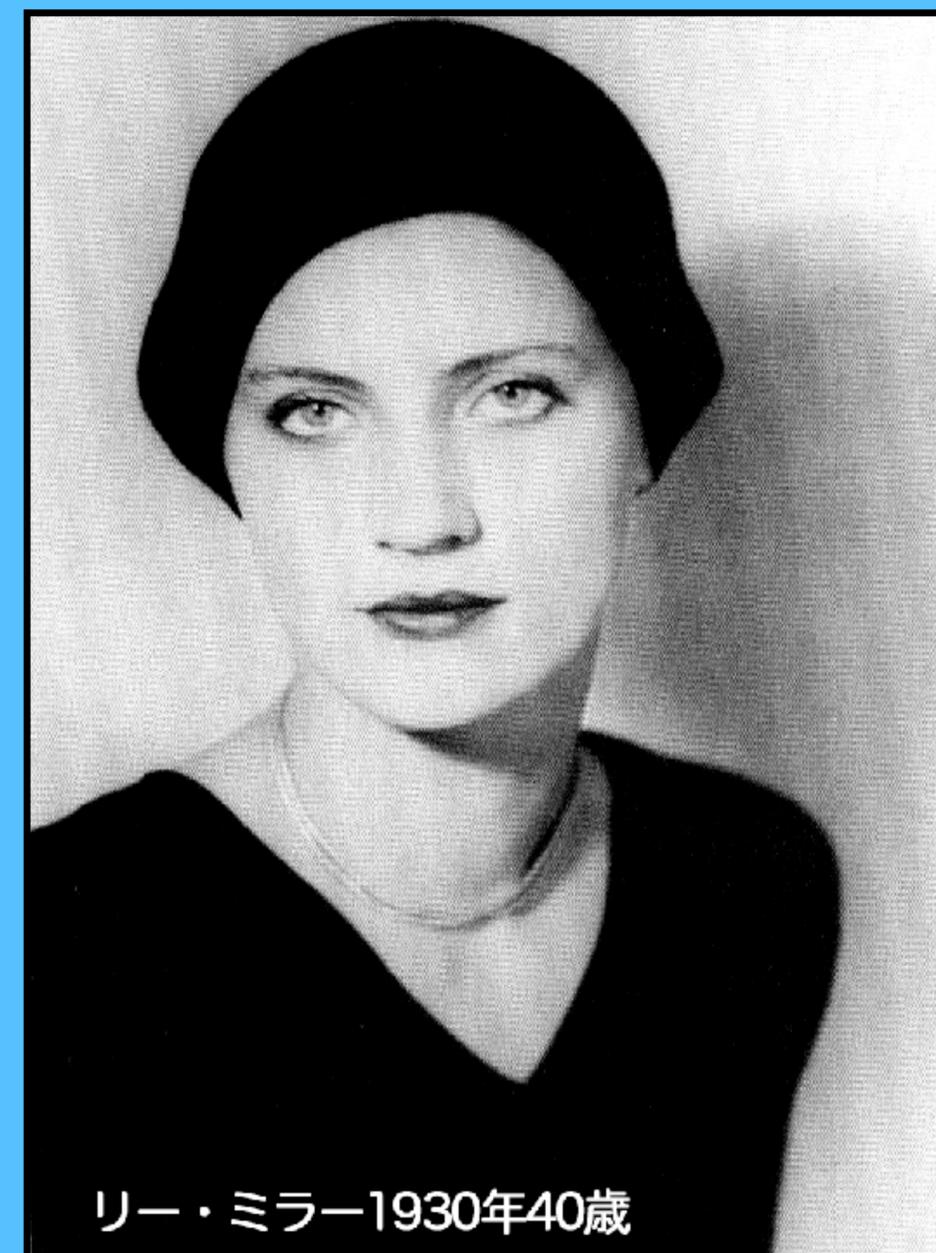
ヴァルパンソンの浴女・アングル作(1808年)

②-10 (1921~1940年・31~50歳)・リー・ミラー



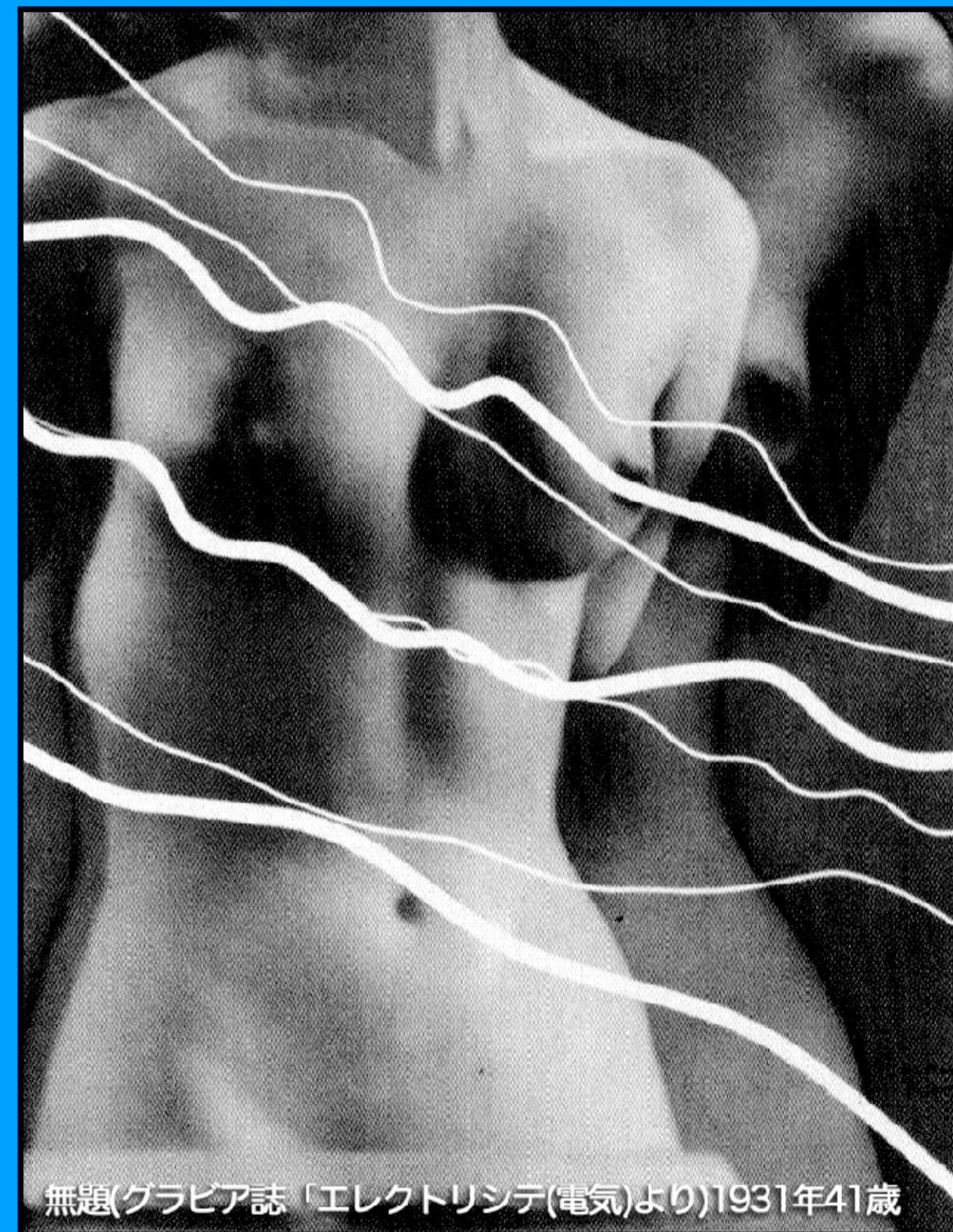
リー・ミラー(ソラリゼーション)1929年39歳

○1929年7月、マン・レイがとあるバーに入ってゆくと、ひとりの若い美しい女性が名のり出ました。「**リー・ミラー**といいます、あなたの**新しい弟子**です」と。弟子はいらないと答えてから、助手に迎えました。キキと別れで孤独だったマン・レイにとって、彼女は助手以上の存在になります。本名**エリザベス・ミラー**、**ニューヨーク近郊の生まれ**で、母はカナダ人、父はアメリカ人。少女時代から人目をひく美貌でモデルになり、モード誌『ヴォーグ』の表紙を飾ったほどですが、独立心が強く、ひとりでイタリア旅行をする間に写真家になろうと決心し、パリにやってきました。当代随一の写真家に学ぼうと考えたのです。



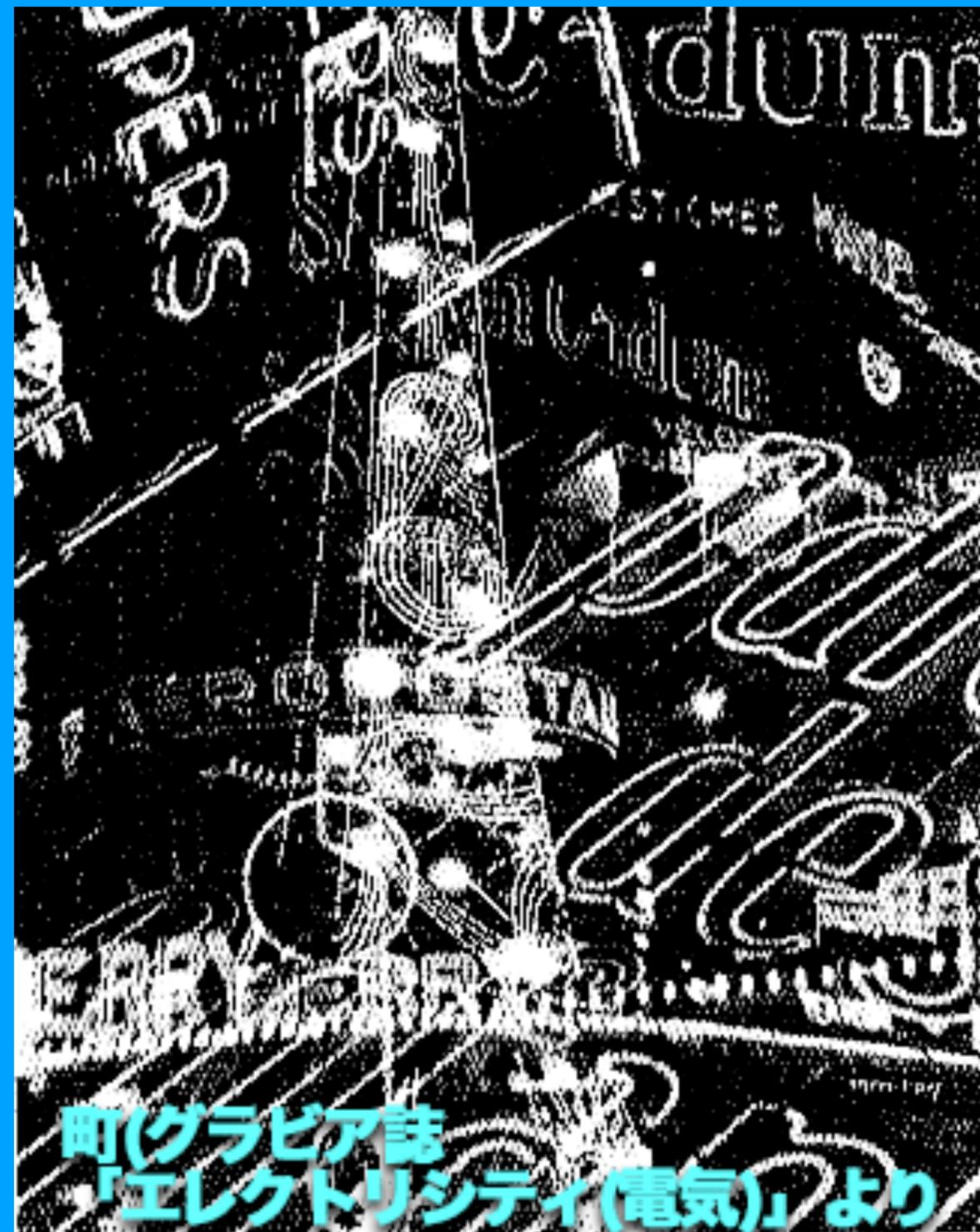
リー・ミラー1930年40歳

②-11 (1921~1940年・31~50歳)・リー・ミラー



無題(グラビア誌「エレクトリシティ(電気)より」1931年41歳)

○ リーは近くに部屋を借りて女友達のタニヤ・ラムと住み、マン・レイのアトリエにかよいながら写真家としての独立をめざします。1931年にマン・レイは電気会社の企画で『**エレクトリシティ**』という**グラビア誌**を出していますが、これは乗り気でない彼をリーが励まし、協力してつくった作品です。同年に二人は別れました。**リーはエジプト人の資産家と結婚**し、一時パリへ戻った**1937年**、**イギリスの富裕なシュルレアリストのローランド・ペンローズ**とつきあうようになってから、マン・レイと和解をはたします。



町(グラビア誌「エレクトリシティ(電気)より」)

②-11 (1921~1940年・31~50歳)・リー・ミラー



マン・レイ 《天文台の時刻に-恋人たち》 1934年44歳



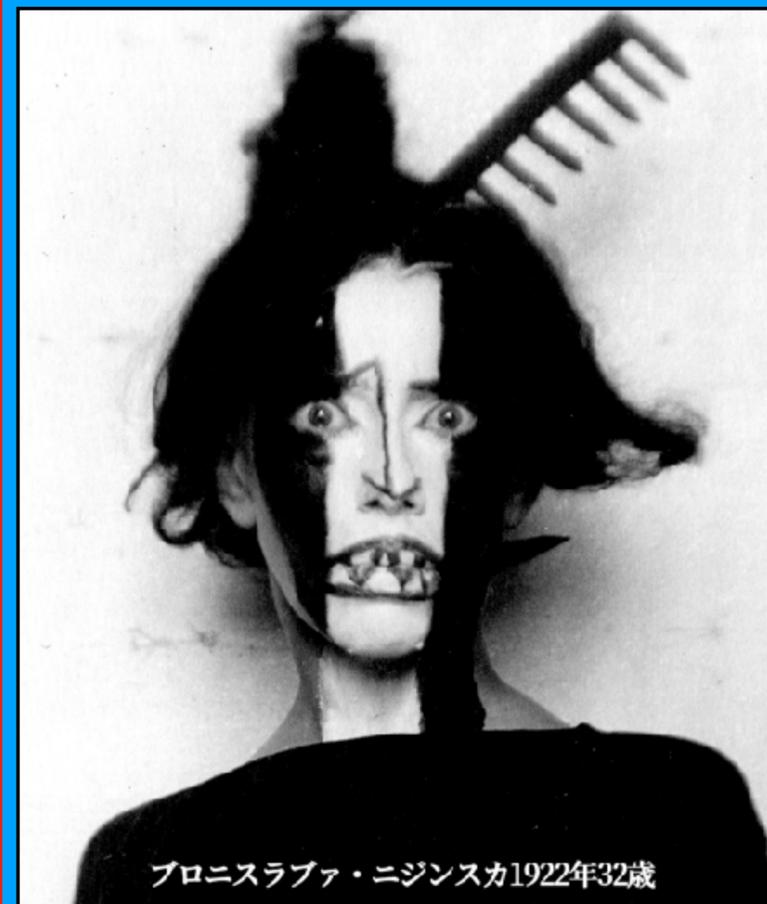
○**天文台の時刻に-恋人たち**・・・マン・レイはリー・ミラーと別れてから、ヴァル・ド・クラーヌ通りの家のベッドの上に1.0×2.5mの大キャンバスをかけ、毎朝カンパーニュ・プルミエール通りのアトリエへ出かける前に、パジャマ姿で立って絵を描きつづけました。2年かけて完成されたこの油彩大作は、**マン・レイの代表作**とみなされることとなります。もとは**キキの唇の写真が発想源**でしたが、この大画面にうかぶ**巨大な唇はリーのもの**で、リー自身を、あるいはそれ以上に、リーとの愛そのものを描いているともいえます。唇の全体が抱きあう恋人同士のようなだとマン・レイは言っていますから。まだら模様の空の下には森。その左奥に乳房のような半円が二つ見えますが、これは二人の家に近かった**パリ天文台のドーム**です。**シュルレアリスム絵画の名作**とされるものです。

②-12 (1921~1940年・31~50歳)・社交界・芸術界・モンパルナス



カザーティ侯爵夫人1922年32歳

○モンパルナスに住んで写真を生業にして以来、マン・レイは多くの芸術家・文学者や社交界の名士をスタジオに迎え入れました。評判が評判を呼び、外国からやってくる客もいたほどです。1922年に訪れたイタリアの貴族**ルイーザ・カザーティ侯爵夫人**も肖像写真を所望しました。それが撮影ミスでブレてしまい、**目が4つに写っているプリント**を見せたところ、夫人はすっかり気に入って焼き増しを注文し、社交界に配って宣伝してくれました。また、アメリカ人の作家・美術批評家**ガートルード・スタインの肖像写真**も有名です。この大家は、マン・レイの絵はともかく写真を評価していて、自分の肖像の「**撮影独占権**」を与えましたが、代金を払わなかったので仲たがいでしてしまいました。



ブロニスラヴァ・ニジンスカ1922年32歳



ナンシー・キュナード1925年35歳

○不世出の舞踊家**ニジンスキーの妹**で、同じロシア・バレエ団の踊り手**ブロニスラヴァ・ニジンスカの肖像**は、舞台用ともマン・レイの演出ともつかない扮装で、新しい感覚のあらわれた写真作品です。イギリスの富豪の娘でアフリカ芸術の蒐集家であった**ナンシー・キュナード**の場合は、一時期の恋人だったアラゴンの紹介でしょう。のちに反ファシズム運動に身を投じ、黒人解放運動の先駆者にもなったこの自由奔放な女性の姿を、マン・レイのカメラは鮮やかにとらえています。



ガートルード・スタイン1922年32歳

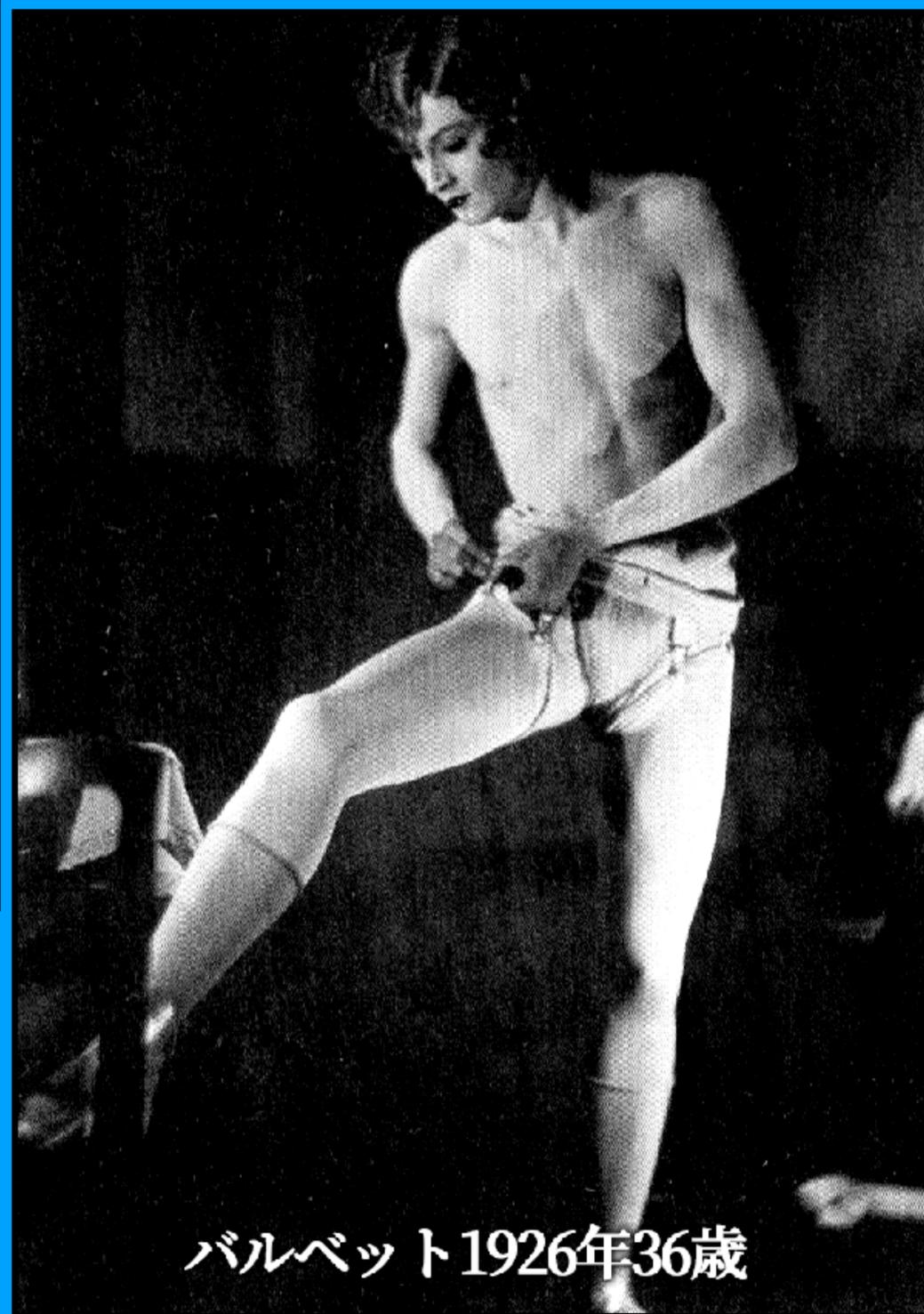
②-13 (1921~1940年・31~50歳)・社交界・芸術界・モンパルナス



ジャン・コクトー1924年34歳



バルベットの肖像1925年35歳



バルベット1926年36歳



○ 芸術界と社交界との仲介役だった詩人コクトーも、早くからマン・レイの写真のファンで、自分の肖像を何度も注文したばかりか、友人名士たちを紹介しました。女装して綱渡りをするアメリカの芸人バルベットの全身像は、コクトーが執心して撮影を依頼し、女装の過程を記録させた連作の一枚です。

②-14 (1921~1940年・31~50歳)・社交界・芸術界・モンパルナス

狂騒の時代のモンパルナス1920年30歳

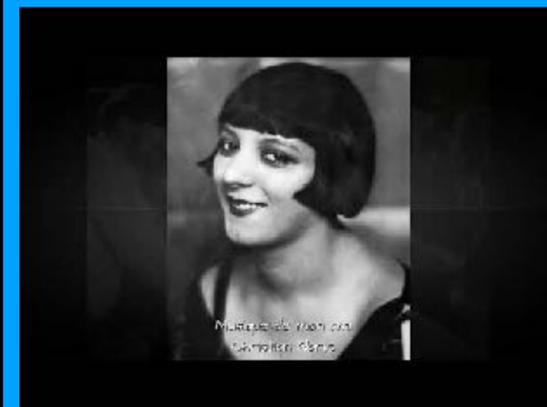


○ 狂騒野時代のモンパルナス・・・1920年代のパリには世界中から芸術家たちが集まり、モンパルナスなどを中心に夜ごとの狂宴がくりひろげられたため、レ・ザネ・フォル（**狂騒の時代**）と呼ばれます。そこから次々と新しい作品が生まれました。歌に踊り、軽演劇にサーカスなど、また芸術家たちの催す**仮装パーティー**も盛んで、「**モンパルナスの女王**」キキはいつも大スターでした。

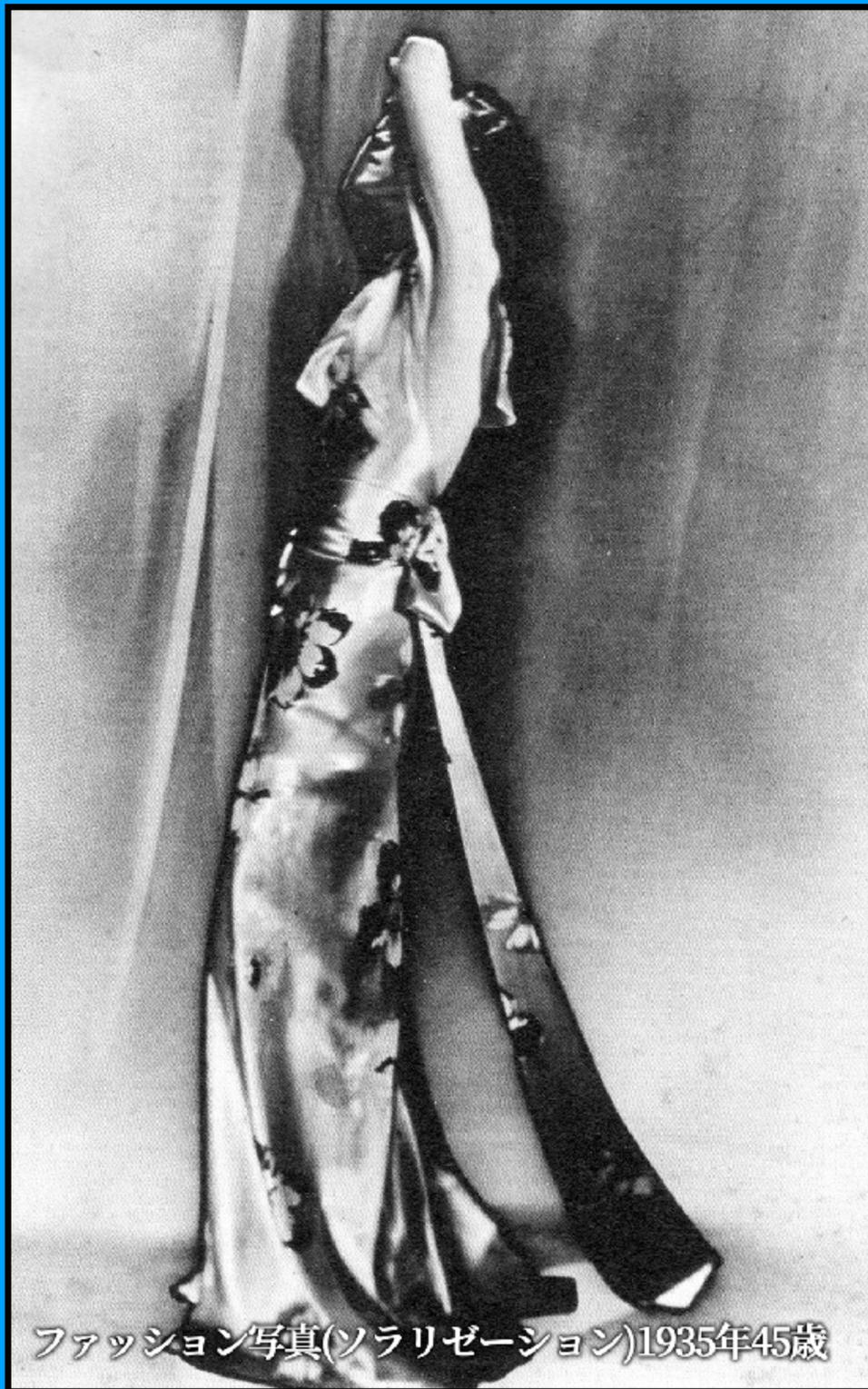


モンパルナスのキャバレノスナップ1925年

○ モンパルナスのキャバレでのスナップ写真と「**キャバレ・デ・フルール**」招待状（キキ・ド・モンパルナスや仮装した**藤田嗣治**などもいる）1925年35歳

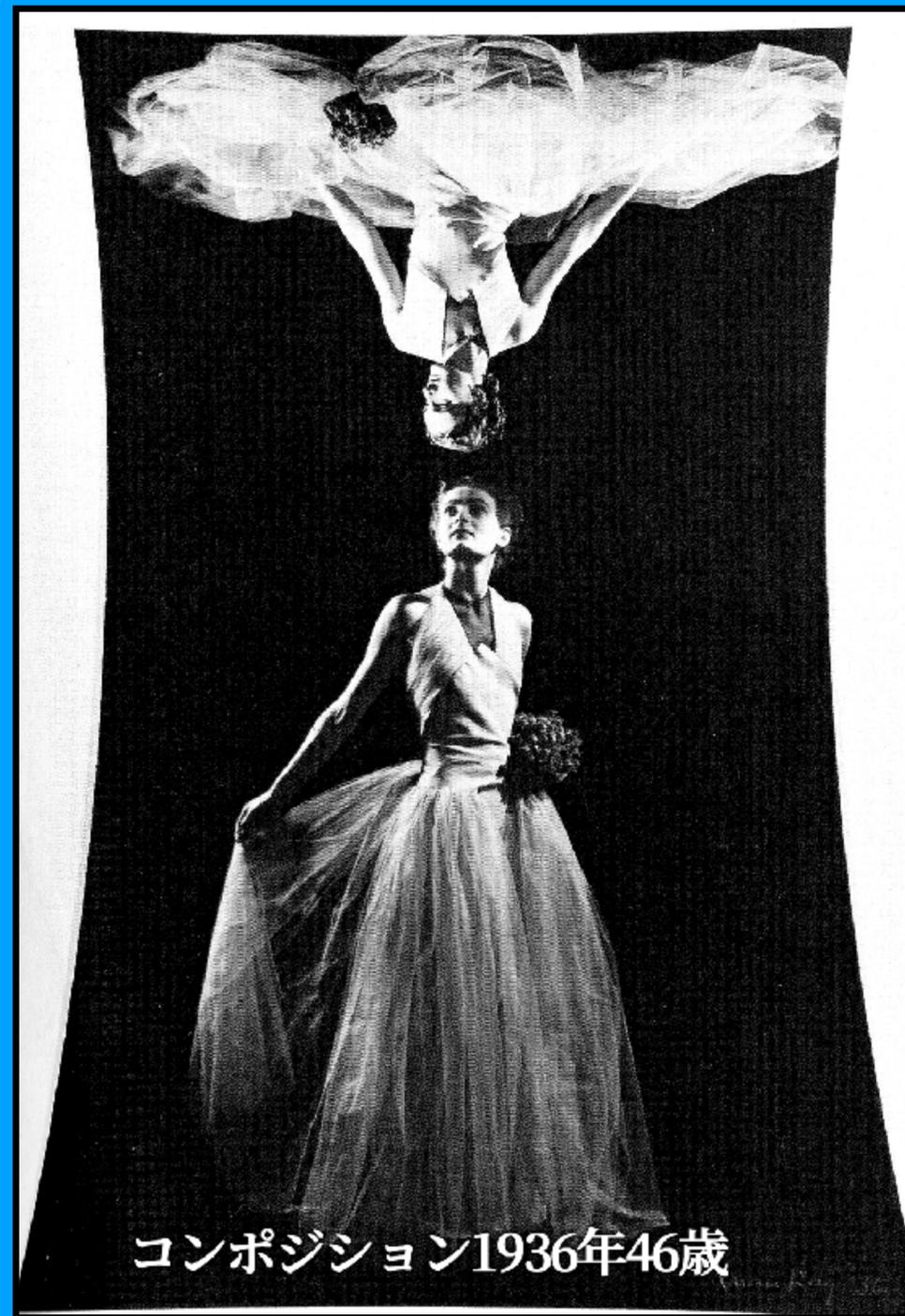


②-15 (1921~1940年・31~50歳)・ファッションと写真



ファッション写真(ソラリゼーション)1935年45歳

○マン・レイがモード（ファッション）の世界とかがわったのは、**1922年にピカビアの妻ガブリエル・ビュッフェ**の紹介で、当時の服飾デザイン界の王者ポール・ポワレの邸宅を訪ね、**オートクチュールの撮影**を依頼されてからでした。以来ほぼ20年間、『ヴォーグ』『ハーバース・バザー』『ヴァニティ・フェア』などの**高級モード雑誌**に、マン・レイの写真が掲載されつづけます。商業的な仕事には抵抗がありましたが、**生活のためにモード関係だけは受け入れ**、結果としてアートの領域をひろげました。衣裳をつけたモデルをマン・レイが撮ると、見たこともない斬新な写像が生まれ、**モードとアートの境界を曖昧**にしたのです。



コンポジション1936年46歳

②-16 (1921~1940年・31~50歳)・ファッションと写真



エルザ・トリオレ
Elsa Triolet
木の葉型シェルウッドを
つないだネックレス
Shell wood beads necklace

July 1931
シェルウッド(白蝶貝)のビーズ、
木綿、銅金具



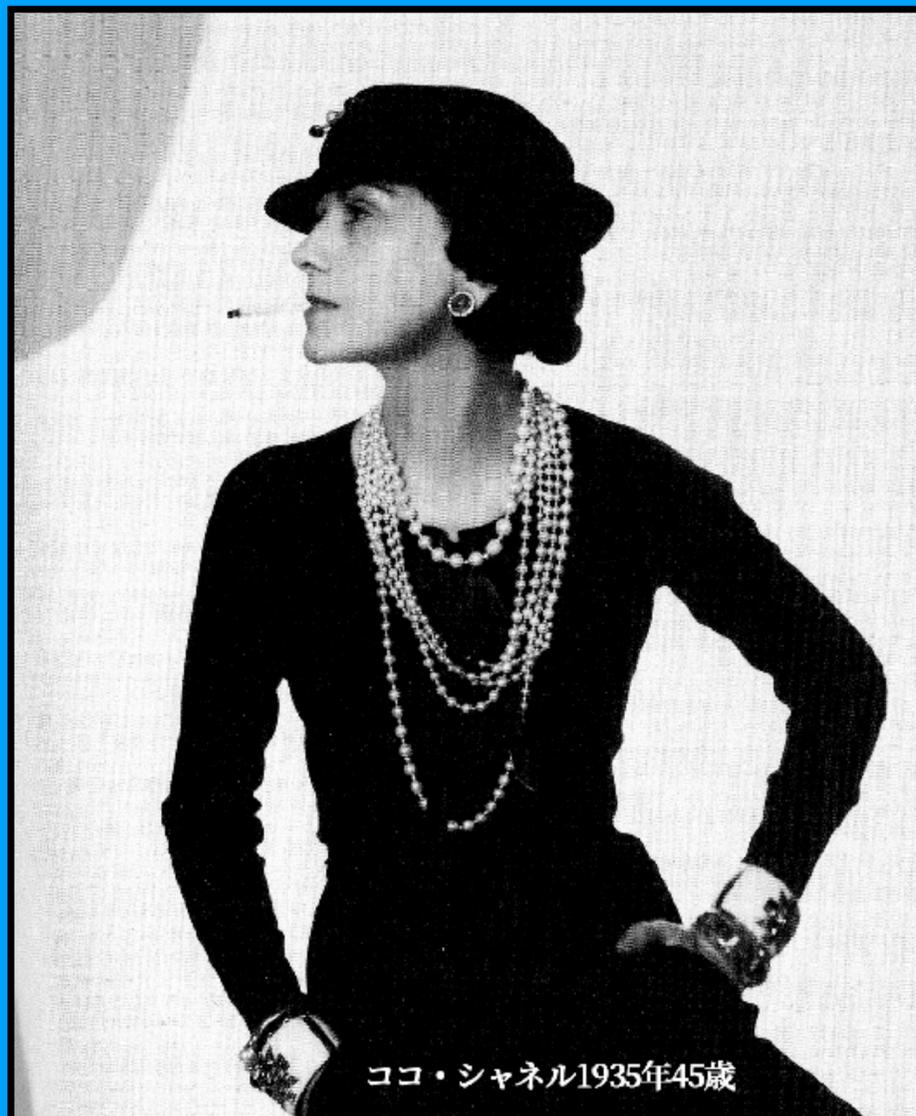
エルザ・トリオレ
Elsa Triolet
ネックレス《ルロン》の試作品
Prototype of *Lelong*,
Epaulette necklace

July 1931

○マン・レイが装飾品を撮ったためずらしい例として、エルザ・トリオレ作のアクセサリがあります。ロシア人のトリオレはソ連の大詩人ウラジーミル・マヤコフスキーの恋人の妹で、モンパルナスに住み、やがてアラゴンと結婚して大作家に成長してゆく女性ですが、1930年代には手仕事で魅力的なアクセサリを制作していて、その撮影を友人マン・レイに依頼したのです。

○エルザ・トリオレはモンパルナスに住んでいたロシア女性で、のちにアラゴンと結婚してからフランスの小説家として名をなす人ですが、マン・レイとも交流がありました。手仕事が好きで、1930年ごろから自分で材料を集めてかわいいアクセサリをつくりはじめ、自作には札をつけて「クレアシオン・ド・コリエ」というスタンプを捺(お)しています。それらを高級メゾンに出すことを考えていたようで、マン・レイに作品の撮影を依頼したのでした。シュルレアリスムを離れて共産黨員になったアラゴンとともに、第二次大戦中は抵抗運動をつづけ、1944年に書いた長篇小説によって女性ではじめてのコンクール文学賞を受賞。以来アクセサリ制作はやめて作家への道を歩むことになりました。

②-17 (1921~1940年・31~50歳)・ファッションと写真



○ モード界ではポワレの時代が終り、**ココ・シャネルが登場**しました。新しい社会の新しい女性像を体現するモードで一世を風靡しますが、彼女はアートの理解者・擁護者にもなり、**マン・レイとの交友からは肖像写真の名作が生まれました**。1930年代にシャネルのライヴァルとされ、大胆なモードを展開したのが**エルザ・スキャパレッリ**です。ダリなどの幻想を衣裳にとりいれ、**モードへのシュルレアリスムの影響を明瞭に示しました**。実際、当時の衣裳や帽子や靴をはじめ、装飾品や香水瓶などでも、アートの浸透は強まり、いわゆるシュルレアリスム風を盛りこむものが出てきていました。

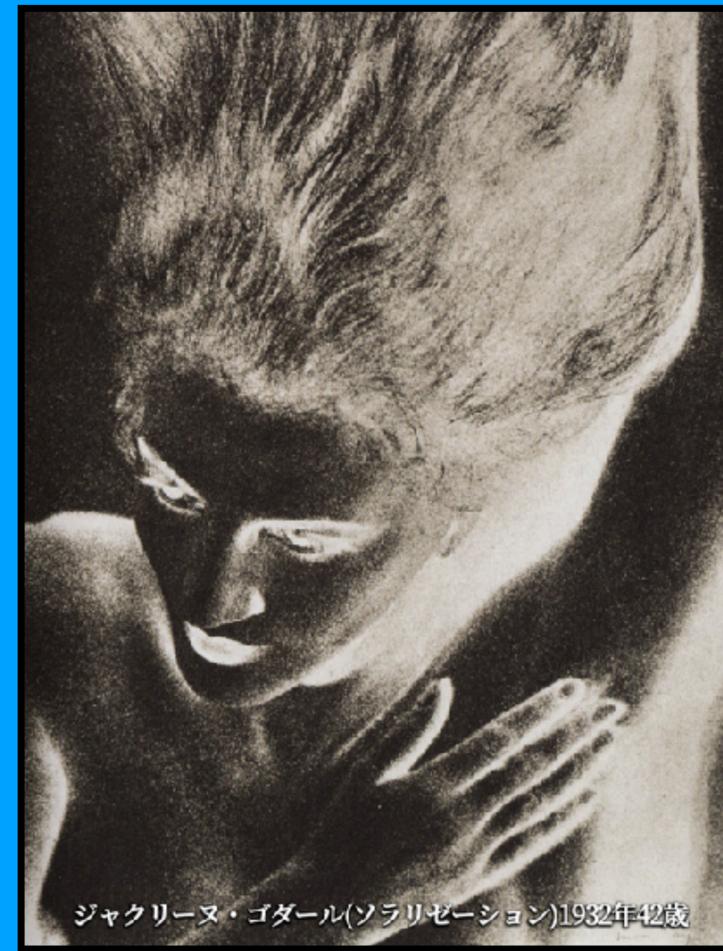
②-18 (1921~1940年・31~50歳)・裸体からマネキン人形まで



眠る女(ソラリゼーション)1929年39歳



祈り1930年40歳

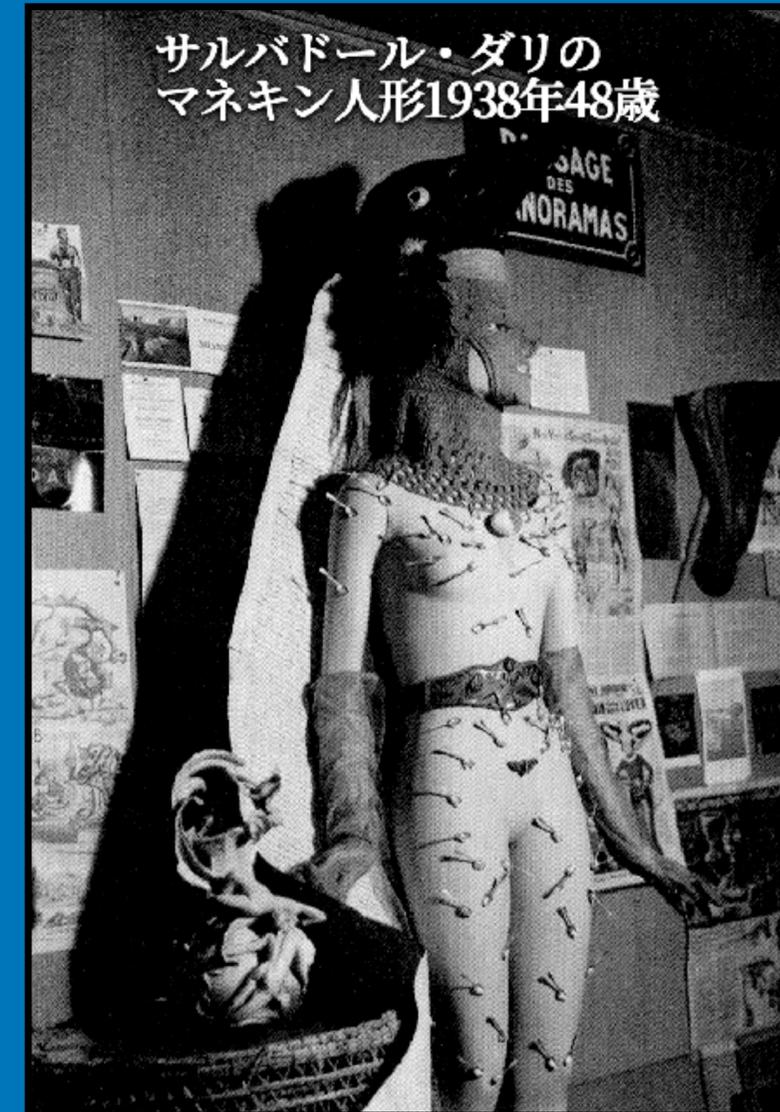
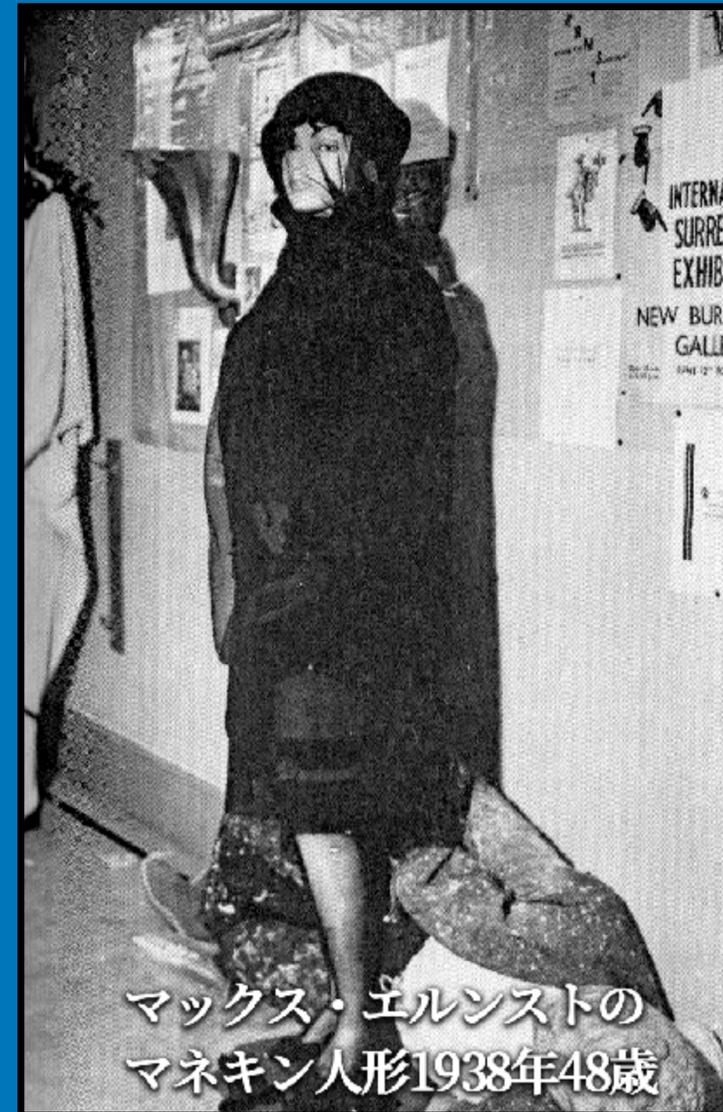
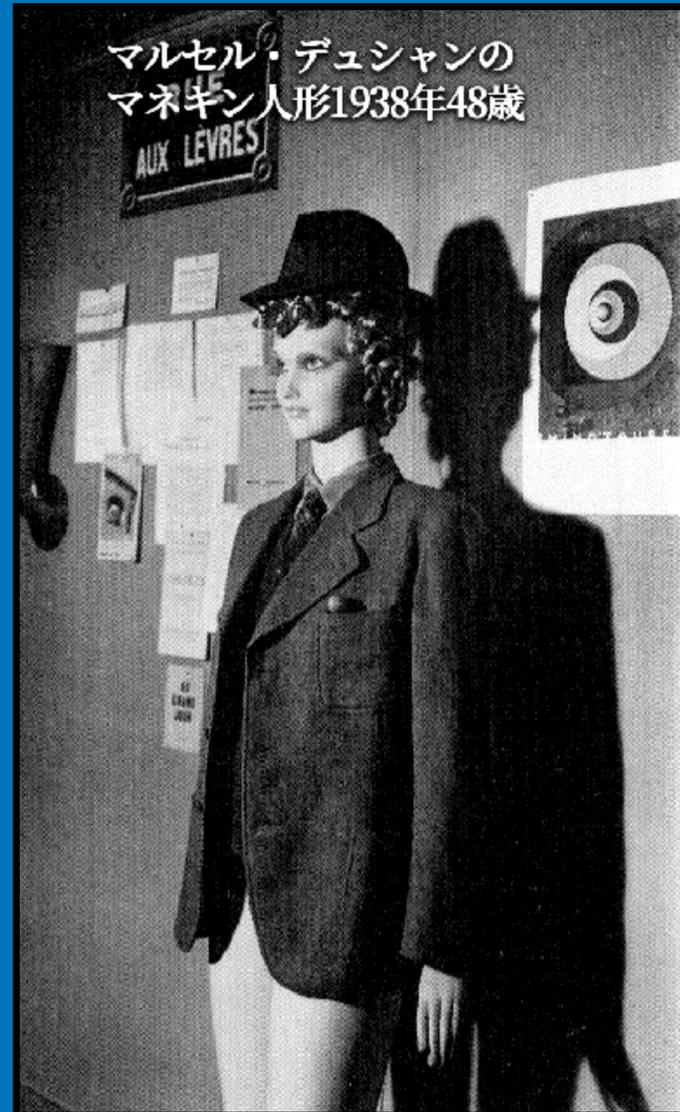


ジャクリヌ・ゴダール(ソラリゼーション)1932年42歳

○裸体、とくに女性の裸体を撮る「ヌード写真」は、19世紀前半の初期写真の時代からありました。ルネサンス以後の裸体画の影響下に生まれたジャンルです。20世紀の西欧でも、こんにちの日本ほど氾濫しているわけではありませんが、型どおりのヌード写真はかなり流布していました。マン・レイもその種の作品を振りましたが、いわゆるポルノ的な傾向はなく、リアルですらなく、パターンを外れで**超現実性を帯びているもの**が中心で、その後の芸術にも大きな影響を及ぼしました。

○モデルは恋人や友人が多く、そこがまず特徴です。たとえばキキ、メレット、ニュツシュの裸体写真では、それぞれの個性にかなう演出や照明をほどこし、オマージュをこめて、ときにはまばゆいほどの美しさを実現しています。他方では特異なポーズのものや、身体の部分だけ撮ったものも目立ちます。有名な《祈り》には背部と手足の先しか写っていません。丸い背部はだれが見ても桃の実を思わせ、アナロジー（類似）による「見立て」を誘います。その下の手足も、左奥に見える物体も、それぞれ意味ありげです。

②-18 (1921~1940年・31~50歳)・裸体からマネキン人形まで



○ 『シュルレアリスム革命』誌に出た写真にも、人間か人形か見わけのつかないファッション写真がありました。人形や人体模型への関心もシュルレアリスムに固有のもので、「人間みたいなもの」や仮装・変身した人体に加えて、マネキン人形もなじみのモチーフでした。1938年パリの「シュルレアリスム国際展」では、会場への通路に16体ものマネキン人形が並び、それぞれ違う衣裳をまとっていました。マン・レイはもちろんデュシャンやエルンストやダリ、ジョアン・ミロやイヴ・タンギーなどの、思い思いに扮装・演出をほどこしたマネキン人形たちのパレードは壮観でした。マン・レイはそのすべてを撮影して『マネキン人形たちの復活』という写真集にまとめ、驚異のドキュメントをのこしたのでした。

②-20 (1921~1940年・31~50歳)・マンレイの「自由な手」



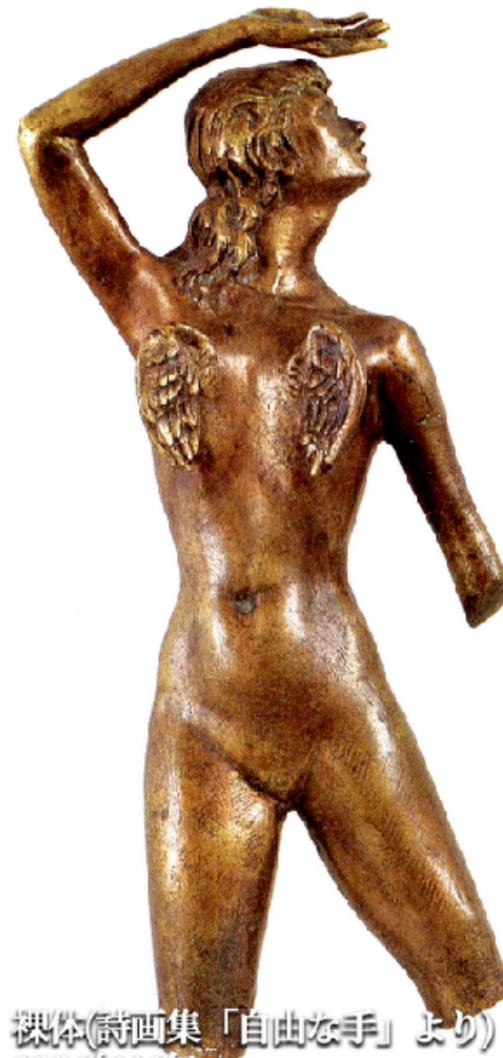
詩画集「自由な手」(マン・レイ画・エリュアール挿詩)



孤独(詩画集「自由な手」より)1936年46歳



力(詩画集「自由な手」)1936年46年



裸体(詩画集「自由な手」より)1936年46年

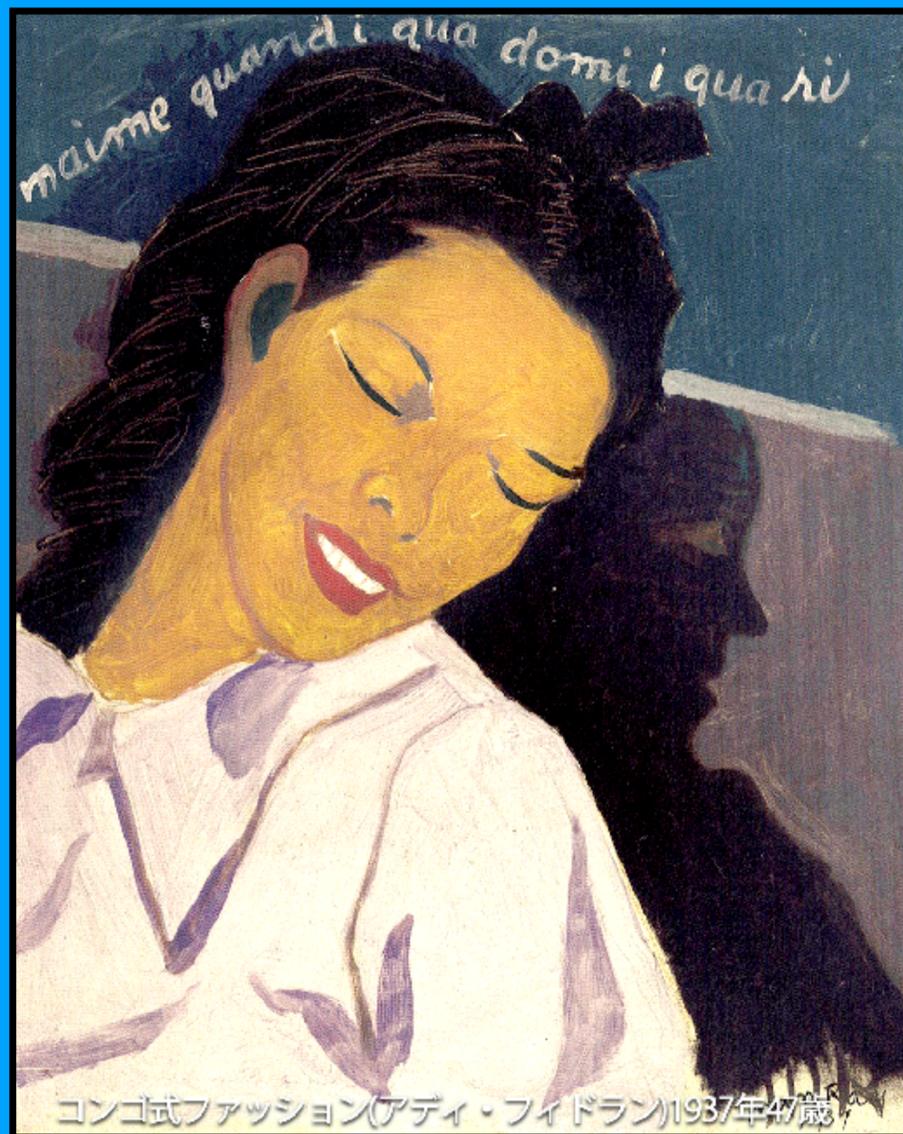
○1930年代後半のヨーロッパは、各地にファシズムが勃興し、不吉な予感が漂っていましたが、マン・レイにとってはある意味で充実した時期でした。モード関係で新たに収入源を得て、本領と自覚している絵画に没頭する暇ができたからです。そのころのマン・レイは南仏を中心によく旅をしましたが、宿のベッドの脇にスケッチブックを置き、寝つく前と起きぬけに思いうかぶアイデアや、夢の記憶をすばやく素描していました。

○『自由な手』というフランス語の題名のうち、「手 Mains」はマン・レイの「マン／人 Man」と発音が似ているので、これは「自由なマン（・レイ）」とも聞えます。英訳すれば「フリー・ハンド」になり、定規なしで自在に線を引く行為や、自由な行動そのものも意味するので、この題名はまさにマン・レイの象徴的・理想的な自画像とも読めます。

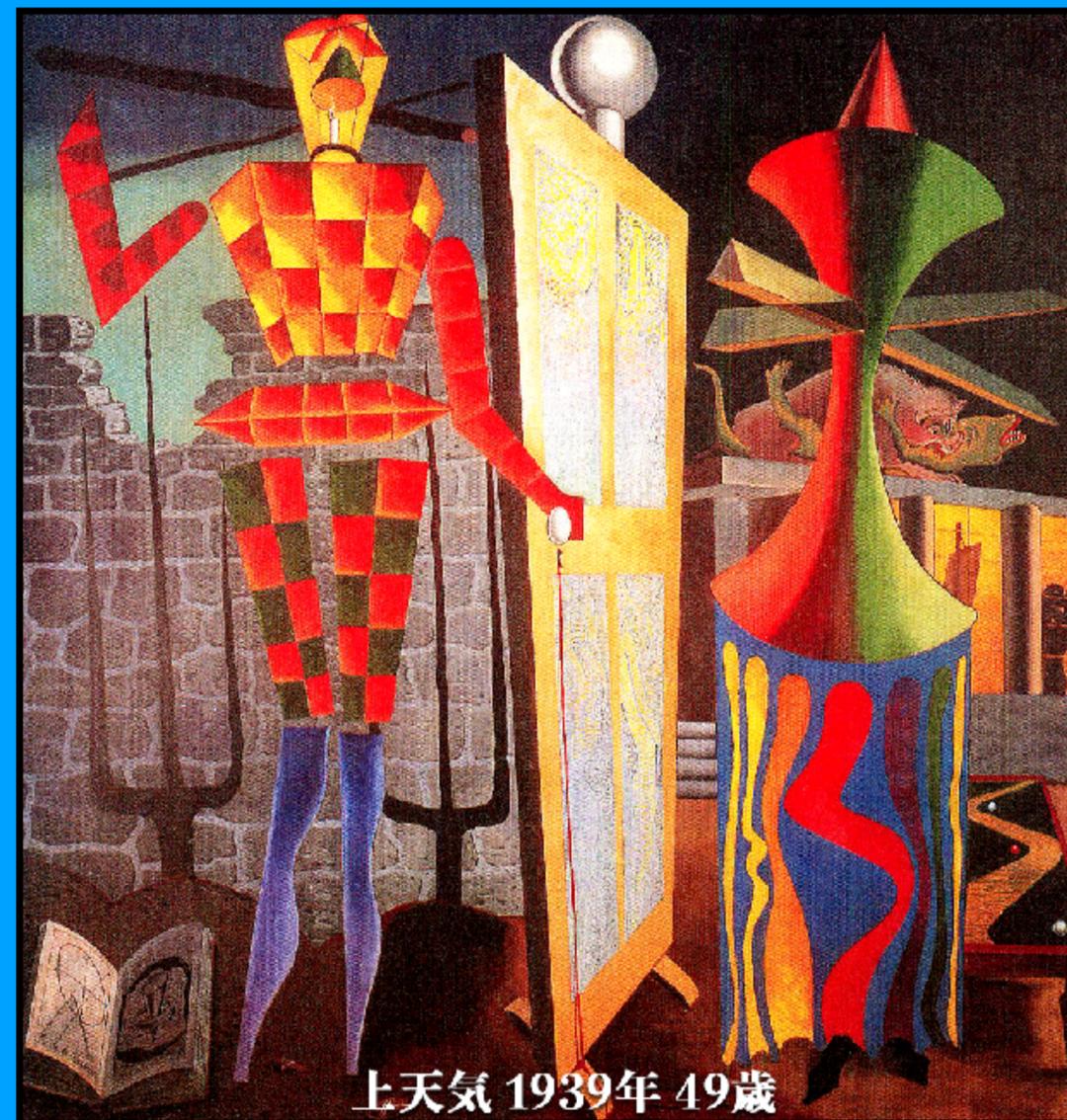
②-21 (1921~1940年・31~50歳)・アディ・フィドラン



アドリエヌ・フィドラン1937年47歳



コンゴ式ファッション(アディ・フィドラン)1937年47歳



上天気 1939年 49歳

○アディ・フィドラン・・・マン・レイがアディを知ったのは1934年冬、歌と踊りのショーのある「バル・ブロメ」でのことです。被写体を探していたとき、この若い美しいダンサーと出くわしました。本名アドリエヌ・フィドラン、カリブ海のフランス領グアドループ島の出身で、「カフェ・オ・レ色の肌」をしたこの魅力的な女性と、その後5年間ほど生活をともにします。

○マン・レイは1937年夏にアンティープに部屋を借り、翌年にはパリ西郊のサンジェルマン・アン・レイにも小さな家を手に入れたので、愛の巢は複数になりました。アディはキキやリーと違って野心がなく、年齢も父と娘ほど離れていたせいもあって、陽気で素直で控え目な恋人でありつづけました。彼女の明るく快活な姿は、ファシズムの暗雲のたちこめる世相とは対照的で、マン・レイの支えにもなっていたことを想像させます。

③-1・(1940~1951年・50~61歳)・ハリウッド・ジュリエット・ブラウナー



ジュリエット・ブラウナーの肖像1941年51歳



ジュリエットとマン・レイ1945年55歳

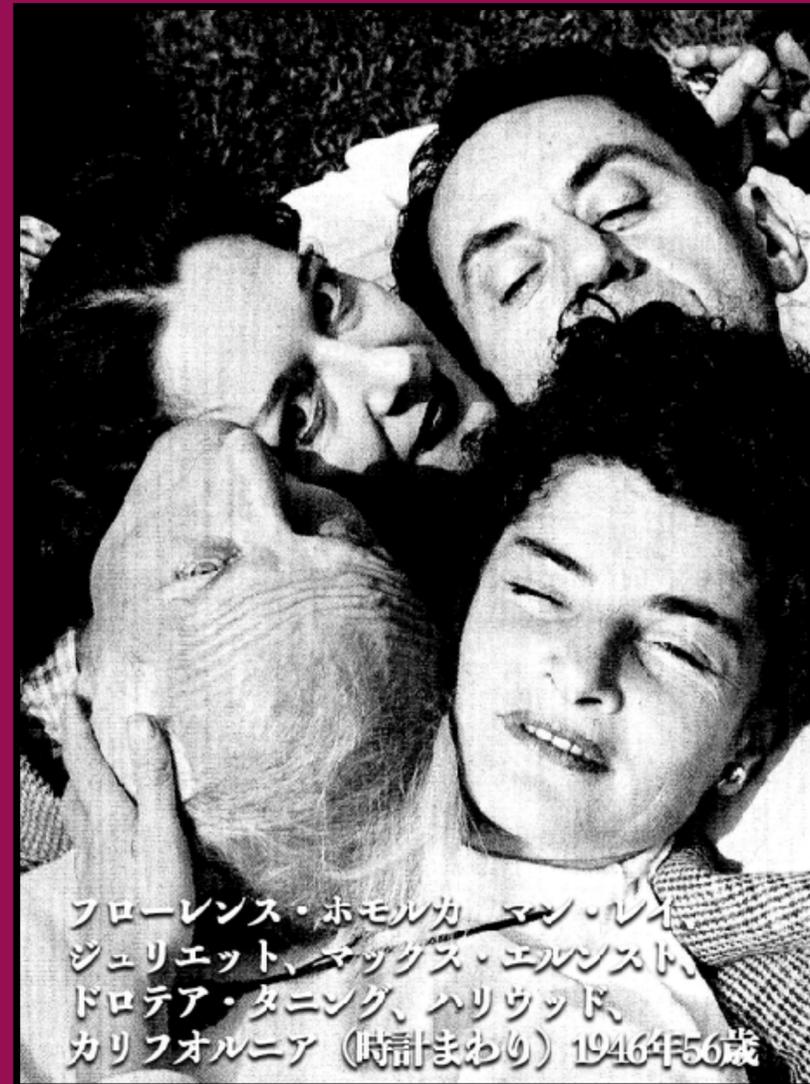


バッハを弾くジュリエット
1941年51歳

○1940年の8月16日、**50歳のマン・レイ**はニューヨークの港に着き、妹の**エルシー・シーグラ**とその娘の**ナオミ**に迎えられました。**ジュリエット・ブラウナー**は**29歳**、**妖精のように華奪な女性**でした。マン・レイと同じブルックリン育ちで、ダンサーやモデルをしながら芸術家たちとまじわり、オランダから来たばかりの画家**デ・クーニング**と交友してもいたので、すでにマン・レイの仕事を知っていました。翌年、**ヴァイン通りに快適な家を安く借りて**、二人は新生活をはじめます。

○**マン・レイ**はパリでの充実した日々を忘れられず、将来の不安もありましたが、優しいジュリエットと南国の穏やかな気候に助けられ、**制作を再開**しました。**アドン・ラクロワとの離婚が成立**していたので、終戦の翌年には**正式に結婚**します。環境はある意味で快適でしたが、マン・レイにとっては「**美しい牢獄**」のようにも見えました。ハリウッド生活になじんでいたジュリエットとは違い、また**芸術の都パリへの思いを募らせていた**のです。

③-2・(1940~1951年・50~61歳)・ハリウッドで合同結婚式1946年



○俳優オスカー・ホモルカの夫人で写真家のフローレンスも駆けつけ、**二組のカップル**のふざけあう珍しい写真を撮っています。**マン・レイ**と**エルンスト**も、**ジュリエット**と**ドロテア**も、ほぼ同い年で気が合いました。マン・レイ夫妻はその後、エルンスト夫妻の**セドナの家**を訪れ、またパリに戻ってからも親しく交友をつづけました。

○**ハリウッドで合同結婚式1946年56歳**・・・エルンストと新しい恋人**ドロテア・タニング**はハリウッドを訪れ、マン・レイとジュリエットのカップルとともに**合同結婚式**をしました。**エルンスト**もブルトンやデュシャン、タンギーらと同様、ニューヨークへ亡命してきたのですが、若い**ドロテア**と**アリゾナ**に移り、**先住民ホビ族の住む絶景の地セドナ**に住んでいたのです。ハリウッドの富裕な友人のコレクター、**アレンズバーク夫妻の邸宅**で四人の結婚式がおこなわれました。

③-2・(1940~1951年・50~61歳)・アートの新天地

美しすぎた女優、挑戦と成長7選

エヴァ・ガードナー



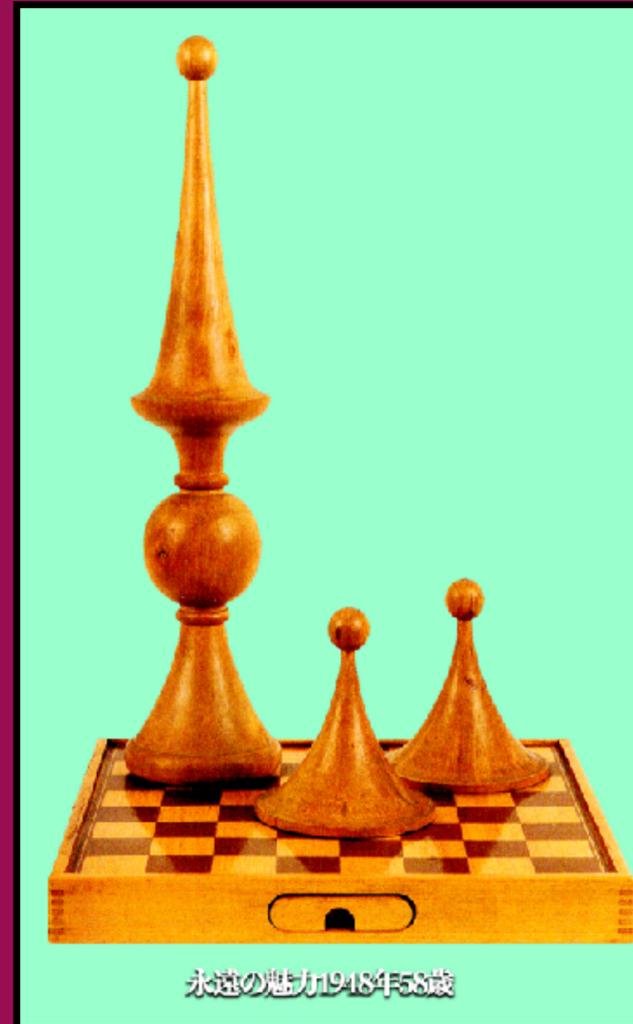
パレットテーブル
(パレット・テーブル)
Palettable

1940 / 1971 Ex. 8/10
画家のパレットの形をしたテーブル

パレットテーブル1940年50歳



ミスター・ナイフと
ミス・フォーク1944年54歳



永遠の魅力1948年58歳



パンドラ役を演じるエヴァ・ガードナー
1950年60歳

○ アートの新天地・・・ハリウッドはマン・レイにとって新天地でした。かつて苦闘をつづけた町ニューヨークを好まず、ゴギャンに倣ってタヒチ島へでも行こうかと考えたほどでしたが、たどりついたこの土地には温暖な気候と平穏な日常があり、そしてジュリエットがいました。ニューヨークへ出て実家の両親とはあまり会わず、第二次大戦の現実にも新しい芸術の動向にもあまり触れないまま、一見無風のオアシスのようなハリウッドで制作することで、マン・レイは新しいアートの可能性を探りました。

○ 到着直後につくったオブジェ《パレットテーブル》183は、絵画に没頭する意気ごみを反映した作品かもしれません。題名はフランス語のパレット（調色板）とテーブル（食卓）をつなげた彼一流の造語で、「絵で食べてゆく」含みもありそうだからです。実際にこの作品は家具のように、ハリウッドの家にさりげなく置かれていました。晩年までつづく言葉の遊び（語呂あわせ）によるオブジェの好例でしょう。

④-1・(1951~1976年・61~86歳)・パリふたたび・アートの中の女性

1951



ジュリエット、フランスへ向かう
ド・グラス号の船上で



パリ、フェルー通りの
アトリエ1951年61歳



フェルー通り▶
Rue Férou
1952 / 1974 Ex. 27/37
リトグラフ(多色)、紙

オブジェ作品
「イジドール・
デュスカスの謎」



○マン・レイはジュリエットと9日間の船旅を終え、**1951年3月20日にパリに着きました**。ホテルからカフェ「クーポール」へ食事に行き、故郷に戻ったと感じたようです。戦後のモンパルナスに芸術家たちはいなくても、町の人々がマン・レイを憶(おぼ)えていました。アメリカにはない芸術への敬意も保たれていて、生きかえる思いでした。

○いまはサンジェルマン・デ・プレ地区が芸術の中心でしたが、マン・レイはその南のフェルー通りに家を見つけました。リエクサンブール庭園の北西にあたる好みの大建築物、サンシュルピス教会の近くです。一見ガレージか倉庫のような一軒家で、高い天井に広い窓があり、アトリエには理想的です。

○**フェルー通りの謎**・・・パリに戻った翌年、マン・レイは油彩画(フェルー通り)を描きました。フェルー通りにできた自分の住居に向かって、荷車を引いていく後ろ姿の男は、**マン・レイ自身**です。荷車の包みは1920年の**オブジェ作品(イジドール・デュスカスの謎)**です。

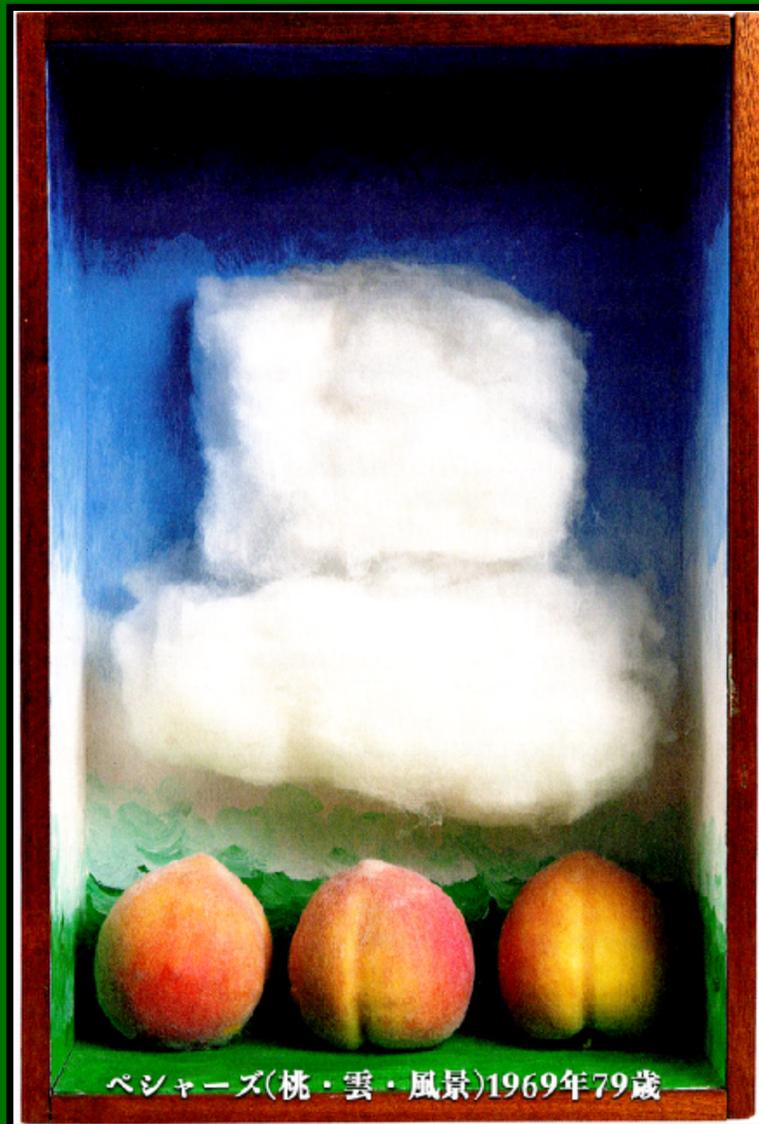
④-2・(1951~1976年・61~86歳)・パリふたたび・アートの中の女性



花-女性1954年64歳



フランスのバレエII
1956/1971/66歳



ペシヤージュ(桃・雲・風景)1969年79歳



贈り物1921年31歳



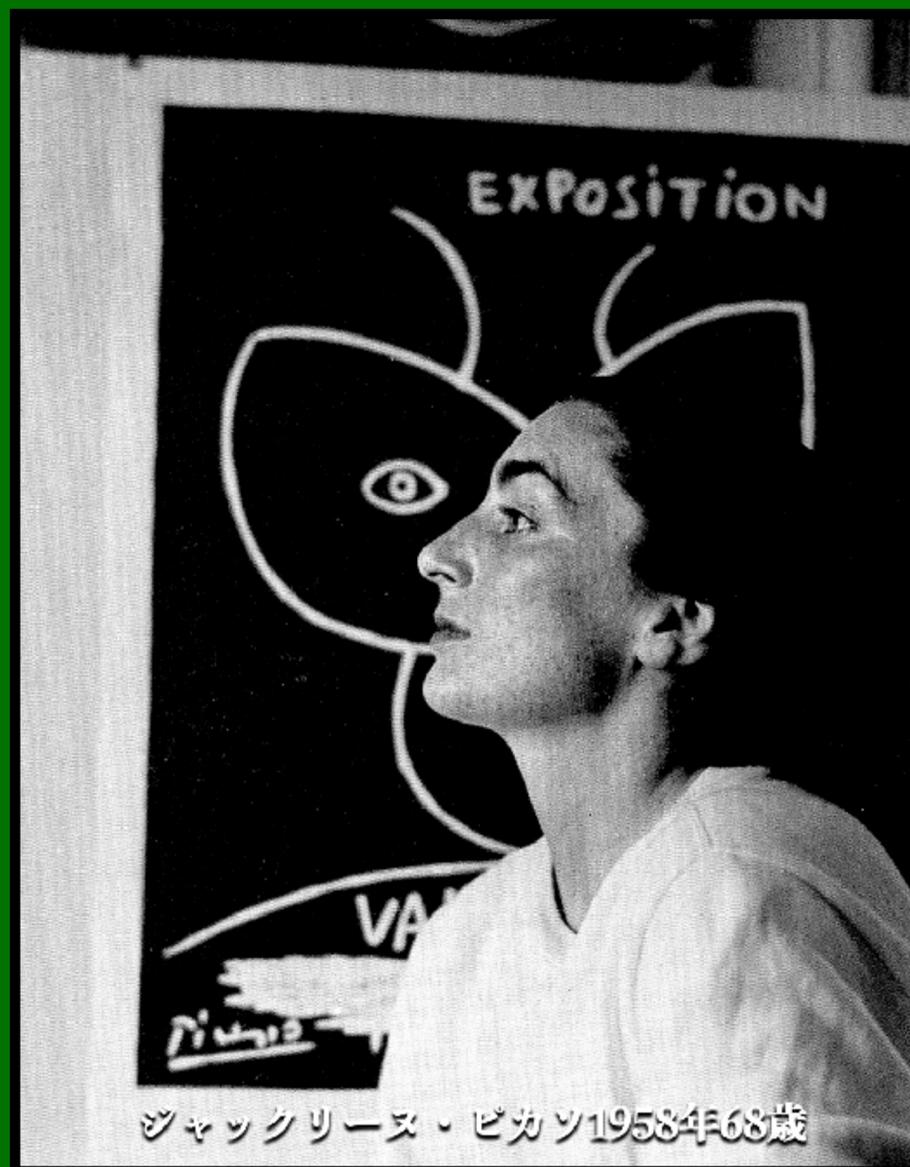
祈り1930年40歳



○マン・レイの制作する女性像もジュリエットが多く、肖像デッサンや本格的なポートレートはもちろん、花を女性に見立てたインク画などを見ても、**吊りあがった葉=目に彼女を投影**しているようです。オブジェ作品ではあいかわらず身近な日用品を用いしており、《フランスのバレエII》には箒木のバレリーナに元ダンサーの妻が重なっています。

○《ペシヤージュ》(ペシユ=桃とニュアージュ=雲とパイザージュ=風景との語呂あわせ)には伝統的な画題「三美神」や、自作の裸体写真《祈り》などへの連想があるかもしれません。《ピンナップ》にコラージュされたピン(縫い針)や安全ピンは、女性の家事のモチーフとして、《贈り物》のアイロンをもつジュリエットともつながるでしょう。

④-3・(1951~1976年・61~86歳)・パリふたたび・アートの中の女



ジャックリーヌ・ピカソ1958年68歳



宮脇愛子の肖像1962年72歳



マッチ箱1962年72歳

○晩年のピカソに熱愛され最後の妻になり、400枚もの絵に描かれた**ジャックリーヌ203 (旧姓ロック)**の肖像写真は、1958年夏に、マン・レイ夫妻がカンヌにピカソを訪れたときの撮影で、個展ポスターの前の横顔は、まさにピカソの好んだとおりのものです。

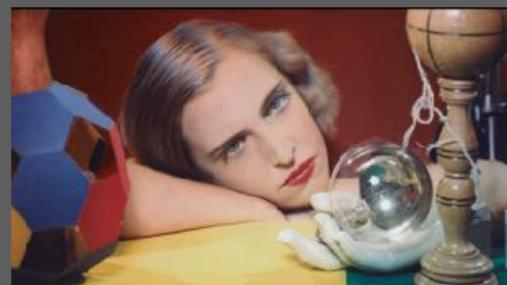
○日本からミラノへ留学し、パリにもよく来ていた彫刻家の宮脇愛子は、リヒターを通じてマン・レイに紹介され、フェルー通りを何度も訪れました。あるとき1枚撮ろうかといわれて、指示どおりに手を組んでいるうちにシャッターが切られ、できあがった写真を見ると、なんと《モナリザ》のポーズ**そっくり**でした。この魅力的な肖像は《マッチ箱》にも複製されています。

④-4・(1951~1976年・61~86歳)・晩年のマン・レイとジュリエット



○70歳のころには体が弱り、杖をつくようになりました。友人たちもすこしずついなくなります。
1976年11月8日、ジュリエットとパリ西郊メイイにデュシャン夫妻を訪ね、歓談し、冗談や人の悪口をいいあって夜中に帰宅すると、ティーニー夫人から電話が入り、最大の親友がいま亡くなったことを知りました。**享年86。モンパルナス墓地に眠る。**

YOUTUBE



今日のテーマ

「謎の芸術家・マン・レイの生涯と作品を探る」

今日のテーマはどうでしたか。ご感想お聞かせください。

次回のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお話しください。